

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第20集

日向館

平成 20・23 年度（一）修善寺天城湯ヶ島線地方特定道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

静岡県埋蔵文化財センター

序

静岡県では、自動車の交通量の増加に対応するため、県道等の新設や拡幅を県内各地において行っています。

今回、報告する日向館は、伊豆市日向に所在し、修善寺天城湯ヶ島線地方特定道路改築事業に伴って、平成20年度に（旧）財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所により、平成23年度に静岡県埋蔵文化財センターによって発掘調査された遺跡です。

この地域は、狩野城、修善寺城、柏久保城など、中世～戦国時代の城郭遺跡がやや多く存在し、軍事的な重要地域であったと考えられます。

地元の豪族狩野氏が当初ここを居館としておりましたが、要害の地ではないため現在の狩野城に移ったとの伝承が、江戸時代に作られた著名な地誌である『豆州志稿』に掲載されています。もとより伝承であり、確実なものではありませんが、「堀ノ内」等の字名より、古くから当地に比定されてきました。しかし考古学調査のメスが入ることはなく、実態は不明なままでした。

日向館の実態が明らかになると期待されて行われた今回の調査でしたが、ここで報告するとおり、確実な館跡の証拠は得ることはできませんでした。しかし中世～近世の遺構と遺物は検出されており。本遺跡の実態解明の一助となると自負している次第です。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県沼津土木事務所及び修善寺支所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長
勝 田 順 也

例 言

- 1 本書は静岡県伊豆市日向^{いずしひなた}316-1他に所在する日向館^{ひなたやかた}の発掘調査報告書である。
- 2 調査は（一）修善寺天城湯ヶ島線地方特定道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課（現静岡県教育委員会文化財保護課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。
- 3 日向館遺跡の本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。
本調査（平成20年度） 平成20年7月～平成21年2月 調査対象面積490㎡ 実掘面積446㎡
本調査（平成23年度） 平成23年6月～9月 調査対象面積590㎡ 実掘面積850㎡
資料整理・報告書作成 平成23年11月～平成24年3月
- 4 調査体制は以下のとおりである。
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
平成20年度（現地調査）
所長兼常務理事 清水 哲 次長兼総務課長 大場正夫 総務係長 山内小百合
会計係長 杉山和枝 次長兼調査課長 及川 司 次長兼事業係長 稲葉保幸
保存処理室長 西尾太加二 東部総括係長 中鉢賢治 調査研究員 日吉高幸

静岡県埋蔵文化財センター
平成23年度（現地調査・資料整理）
所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利眞 主幹兼事業係長 村松弘文
総務係長 瀧みやこ 調査課長 中鉢賢治 調査第二係長 溝口彰啓
主査 岩崎しのぶ 主任 木崎道昭
- 5 本書の執筆は岩崎、木崎、鈴木三男、小川とみが行った。分担は以下のとおりである。なお、報告書の最終的文責は木崎にある。
第1章第1節 岩崎 第2節 木崎
第2章 木崎
第3章第1節 木崎 第2節 岩崎・木崎
第4章・第5章 木崎
付編 鈴木三男 小川とみ
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 作業の効率化を図るため、業務の一部を以下の会社に委託した。
平成20年度 測量業務委託 株式会社デジック
平成23年度 掘削業務委託 株式会社イズケン
測量業務委託 株式会社シン技術コンサル
整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ
- 8 出土木材の樹種同定を東北大学教授鈴木三男氏に依頼した。
- 9 発掘調査と整理作業では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる（敬称略）。
池谷初恵 岩名建太郎 河合修 佐々木富士子 佐藤達雄
- 10 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
($X = -115330$, $Y = 40850$) = (A, 1)
- 3 遺構図、遺物実測図の縮尺は、遺構1/30、遺物1/3を標準とし、それぞれにスケールを付した。
- 4 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。
- 5 基本土層名は第3章第1節の基本土層図（第5図）に表示した名称（ローマ数字）を用いる。これに対して地区ごとの個別の土層や遺構の覆土等はアラビア数字を用いた。
- 6 第2章第2節の周辺遺跡地図（第2図）は国土地理院発行1：25,000地形図「修善寺」・「伊東」を複写し加工・加筆した。
- 7 遺物の写真図版（図版8～10）の個々の遺物につけた番号は、遺物実測図（第28～29図）の番号と一致する。すなわち、16-2とあれば第16図の2ということの意味する。また、写真図版にのみ掲載した遺物については、①、②という表記にした。
- 8 付編の表・図版番号については、本書の他の表・図版とは別個に付け、独立した番号にした。
- 9 遺構記号については、以下のように表記した。
掘立柱建物跡：SB、溝状遺構：SD、土坑：SK、小穴：SP、不明遺構：SX
- 10 平成23年度調査のD区については、報告にあたって北側部分をD-1区、南側部分をD-2区と呼称した。
- 11 本文や引用・参考文献の記載にあたっては、以下のように略した箇所もある。
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所→静岡文研
(各) 県教育委員会→(各) 県教委
(各) 市・町教育委員会→(各) 市・町教委
- 12 引用・参考文献については巻末47ページにまとめて掲載した。註については各章の最後に記載している。

目次

第1章 調査に至る経緯	
第1節 今回の調査に至る経緯	1
第2節 本遺跡についての史料と過去の研究、調査について	2
第2章 周辺環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の概要	
第1節 調査の方法と経過	9
第2節 基本土層	11
第4章 調査の成果	
第1節 遺構	16
第2節 遺物	39
第5章 まとめ	45
引用・参考文献	47
付編 静岡県日向館出土木材の樹種	48

写真図版

抄録

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第11図 A区遺構配置図	18
第2図 調査対象範囲図	2	第12図 B・C・D-1区遺構配置図	19
第3図 周辺遺跡分布図	6	第13図 SB01平面・断面図	20
第4図 グリッド配置図	9	第14図 SD01平面・断面図	21
第5図 基本土層図	11	第15図 杭列01平面・断面図	21
第6図 B区北壁・南壁土層断面図	13	第16図 SD02平面・断面図	22
第7図 A～D区東壁土層断面図(1)	14	第17図 SD03平面・断面図	24
第8図 A～D区東壁土層断面図(2)	15	第18図 SD04平面・断面図	24
第9図 調査区全体図	17	第19図 SK(土坑)平面・断面図(1)	26
第10図 調査区地区割図	17	第20図 SK(土坑)平面・断面図(2)	27

第21図	S P (小穴)平面・断面図(1)	……29
第22図	S P (小穴)平面・断面図(2)	……30
第23図	S P (小穴)平面・断面図(3)	……31
第24図	S P (小穴)平面・断面図(4)	……32
第25図	S P (小穴)平面・断面図(5)	……33

第26図	S X 01 平面・断面図	……37
第27図	S X 02 平面・断面図	……38
第28図	出土遺物(遺構)	……40
第29図	出土遺物(遺構外)	……42

挿表目次

第1表	工程表	……10
第2表	遺構計測表(1) 土坑	……28

第3表	遺構計測表(2) 小穴	……34～36
第4表	遺物観察表	……43・44

図版目次

図版1	調査区全景(合成写真)
図版2	1 A区全景(南西より)
	2 C・D区全景
図版3	1 B区全景(南西より)
	2 遺跡遠景(南西より)
図版4	1 S D 01 完掘状況(南西より)
	2 S D 02 完掘状況(南西より)
図版5	1 S X 01 検出状況(南東より)
	2 杭列01 検出状況(南西より)
図版6	1 S D 03 完掘状況(北西より)
	2 S X 02 完掘状況(南西より)
図版7	1 S B 01 完掘状況(北西より)
	2 S P 17・18・23 他完掘状況(北西より)
	3 S K 25・27・28 他完掘状況(南西より)
	4 S P 17 礫検出状況(南東より)
	5 S P 93 礫検出状況(北西より)

図版8	1 遺構出土陶器他(外面)
	2 遺構出土陶器他(内面)
	3 遺構外の陶器他(1)(外面)
	4 遺構外の陶器他(1)(内面)
	5 遺構外の陶器他(2)(外面)
	6 遺構外の陶器他(2)(内面)
図版9	1 遺構外の陶器他(3)(外面)
	2 遺構外の陶器他(3)(内面)
	3 遺構外の陶器他(4)(外面)
	4 遺構外の陶器他(4)(内面)
	5 遺構外の陶器他(5)(外面)
	6 遺構外の陶器他(5)(内面)
図版10	1 S D 01 出土かわらけ
	2 S X 02 出土かわらけ
	3 灯明皿に転用したかわらけ
	4 遺構出土かわらけ(外面)
	5 遺構出土かわらけ(内面)
	6 遺構外のかわらけ(外面)
	7 遺構外のかわらけ(内面)
	8 近世の乗燭
	9 S D 01 出土漆椀
	10 S K 06 出土砥石
	11 縄文時代の打製石斧

第1章 調査に至る経緯

第1節 今回の調査に至る経緯

平成16年4月、伊豆半島の中央部に位置する修善寺町、中伊豆町、天城湯ヶ島町、土肥町の4町が合併し、伊豆市が誕生した。伊豆市は市内の8割以上を山林で占めており、市域の南側には伊豆地域の最高峰である天城山がそびえている。市の中央部には、天城山から発する狩野川が流れている。

伊豆市柏久保から同市市山まで、県道349号修善寺天城湯ヶ島線が狩野川の右岸に沿って走っている。この道路は交通量が多く、今後も交通量の増加が見込まれている。しかしこの道路の幅は狭小であり、地形の都合上、拡幅工事を実施することは不可能であった。このため、静岡県は（一）修善寺天城湯ヶ島線合併支援重点道路整備事業工事を計画し、伊豆市加殿から同市日向にかけてバイパスとなる道路を新設することとした。

平成17年度に静岡県沼津土木事務所が静岡県教育委員会文化課（平成22年度から文化財保護課に課名変更。以下文化課、文化財保護課と略）に開発事業の照会を行ったところ、この事業の対象範囲の中に、周知の埋蔵文化財包蔵地である日向館が存在することが明らかになった。平成18年1月から文化課は沼津土木事務所修善寺支所、伊豆市教育委員会との協議を始め、同年6月に文化課と伊豆市教委は現地踏査を実施した。この結果を踏まえ、県教育長名で沼津土木事務所長宛に確認調査が必要である旨を報告した。平成19年4月、文化課が確認調査を実施したところ、館跡であることを示す遺構、遺物が存在する可能性が高いことが判明した（静岡県教委 2008）。道路という恒久的な工作物の設置により、埋蔵文化財の破壊と等しい状態になることから、本発掘調査を実施する運びになった。平成20年3月に沼津土木事務所長は県教育長宛に調査依頼を提出し、県教育長は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下埋文研と略）が調査を行うことが妥当であると回答した。

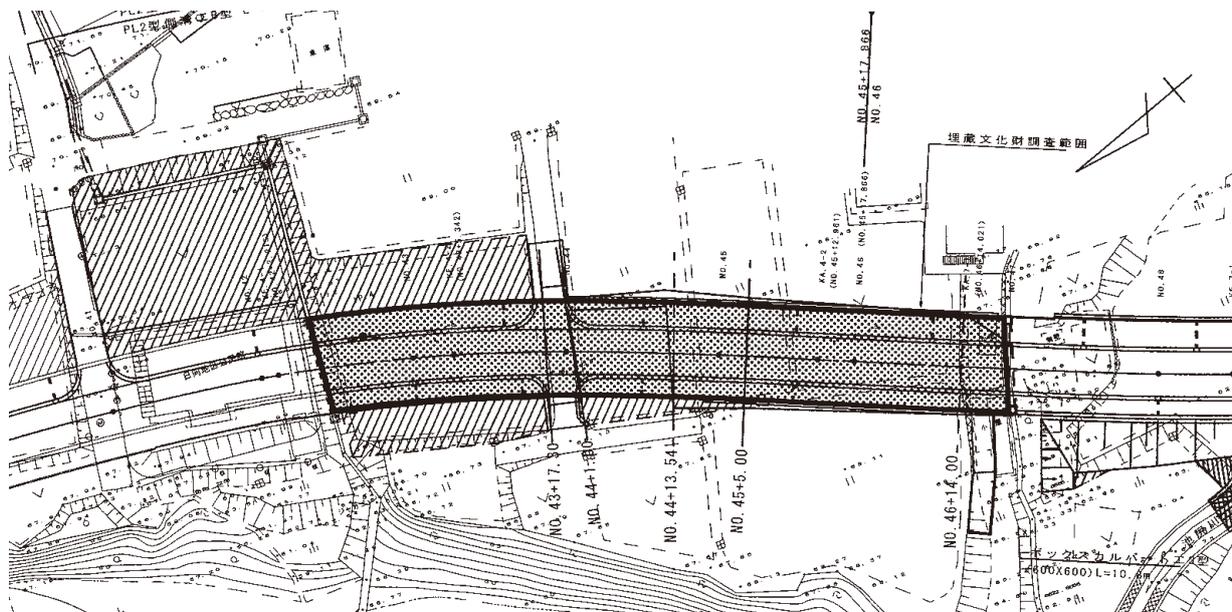
本発掘調査は用地買収の都合上、平成20年度と同23年度の2回に分けて実施した。平成20年度は4月18日に沼津土木事務所修善寺支所、文化課、埋文研の三者により調査範囲の確認と方法等について協議



第1図 遺跡位置図

を実施した。この結果を踏まえて、7月から文化課職員立ち会いのもとで表土除去作業を行い、埋文研が同年9月から翌年2月まで本発掘調査を実施した。

平成23年度は4月14日に沼津土木事務所修善寺支所、文化財保護課、静岡県埋蔵文化財センター（以下センターと略）の三者により調査方法等について協議を実施した。この結果を踏まえて、センターは同年6月から9月まで本発掘調査を実施し、11月から翌年3月まで報告書作成のための整理作業を実施した。



第2図 調査対象範囲図

第2節 本遺跡についての史料と過去の研究、調査について

1 日向館についての伝承と史料

日向館について直接言及した文献資料は極めて乏しく、以下に引用する『豆州志稿』及び『増訂豆州志稿』に記載された伝承が存在するのみである（以下の引用では一部新字に改めた。また、読み易くするために空白を入れた箇所がある。〔 〕は報告者による）。

『豆州志稿』（注1）巻十二

狩野氏ノ堡（〔以下割注〕田方郡日田〔向の誤り〕村）堡ノ跡今堀ノ内ト云 堀ノ跡見ユ コノ地分内狭ク要害ナラザル故カ柿〔柿〕木ニ徙ル（〔以下割注〕一説ニ加藤景員伊勢ヨリ来リ 狩野介茂光ヲタノム 茂光具〔其の誤りか〕勇敢ヲ愛シ 此ニ居ラシム）（以下略）

『増訂豆州志稿』（注2）巻之十二

○狩野氏ノ堡址 ○日向村堀之内ト云處ナリ 今空隍存ス コノ地分内狭ク且ツ要害ナラザル故 柿木ニ徙ル 一説ニ云 加藤景員伊勢ヨリ来リ 狩野茂光ニ頼ル 茂光其勇敢ヲ愛シ 此ニ居ラシムト

『増訂豆州志稿』巻之二下

○日向村（中略）【増】北条役高帳豆州狩野日向郷 文禄三年検地帳豆州宝郡日向郷アリ ○（中略）（【増】名迹志ニ曰 此所ニ堀内ト云地アリ 昔狩野茂光ガ居住ノ所ナリト 狩野氏砦址ハ柿木村ニアレド 此地ニモ居シナラム（後略）

他に比較し得る史料も伝承も管見の限り存在しないため、確かめるべくもないのであるが、江戸後期～明治前期の伝承では、狩野氏の館は当初は日向にあったが、そこが狭く要害の地ではなかったので柿木に移ったとされる。また、『増訂豆州志稿』が引用する「名迹志」（『伊豆名迹志』。現存せず）によれば、狩野茂光が、この地にも居住したとされている（も、とされているのは当然柿木も日向もということであろう）。狩野氏の柿木へ移転の時期についての明確な記述はない。一説では、狩野茂光が加藤景員を日向館に住ませたとある。狩野茂光も加藤景員も他の史料で事跡をうかがうことのできる人物であり、狩野茂光は『吾妻鏡』により、治承4年（1180年）の石橋山の戦いで頼朝軍に参加して戦死したことが確認できるので、茂光関連の伝承の下限は1180年となる。また、『豆州志稿』には「堀ノ跡見ユ」、『増訂豆州志稿』には「今空隍存ス」とあるが、詳細は不明である。

次に日向館について直接言及したものではないが、戦国時代の確実な史料が存在するので以下に掲載する（前述した『増訂豆州志稿』に引く「文禄三年検地帳」は本地域のものは現存しない）。

『小田原衆所領役帳』（注3）

（前略）

松山衆知行役

一 狩野介

百卅八貫九百文

豆州狩野日向郷

卅一貫文

西郡西明寺分

貳百貫文

中郡妻田郷

此内 百貫役御免

四拾九貫五百五拾八文

同所 癸卯検知増分

以上 四百拾九貫五百五拾八文

（後略）

『小田原衆所領役帳』については（注3）に譲るが、狩野介は、松山衆（武蔵国「松山城を中心に参集した武士団。狩野介以下15人」）の筆頭に掲げられた武士であり、その役高の地の先頭に豆州狩野日向郷が記載されている。伊禮正雄氏は、「常識的に考えた場合、多くの所領のうち最大のところに日常生活の場所－（中略）－が置かれる、と考えた方が自然であらう」とする一方で、「或人々は、その本拠地を最高貫高のところに持っていない。しかし、根拠地は書立の第一位に記されたところと一致する」とする（伊禮 1976）。この後者の典型例として挙げられているのが、狩野介と日向郷の例なのである。伊禮氏はほかに、この『役帳』の役高は知行高である可能性も指摘している。また、所領の「記載の順序が、本人ないしその家の次々と開発拡大して行った所領、あるいは、後北条氏から次々と与えられていった新恩の地、の時間的順序を示している」可能性を示唆する。これらの説はもとより仮説であるが、これに従うならば、狩野介ないしその一族は、日向郷の地を元来本拠にしていたが、相模や武蔵に所領を拡大し、『役帳』の作成された永禄年間には北武蔵の比企郡、吉見郡に至った。むしろ、このころになると活動の中心の地は相模や武蔵であった可能性が指摘できる。この史料では、役高の所領が日向郷にあるとの記載のみであるが、この本拠地の場所としては、本遺跡の可能性もあると言えるであろう。この点については本報告書の第5章の「まとめ」で再述する。

2 本遺跡の過去の研究と調査

戦後に発掘調査が行われるまでは、日向館についての知見は前述の『豆州志稿』、『増訂豆州志稿』のレベルを大きく越えるものではなかった。有名な沼館愛三の研究（沼館 1937）でも同様である。「今尚空堀の跡を見るも之は城といふより鎌倉時代特有の屋敷であつて、恰も有度村渋川館に見る如く、屋敷の周囲に濠を掘りて敵に対した」（前掲論文より引用。新漢字に改めた）とあり、現地踏査を行って堀を確認し、

城ではなく居館であるとの指摘を行っている。また、「此移住年代は詳かではないが、諸説を総合して工藤介茂光の時代であらう、茂光の日向居住と柿木居住の史実があるから、前半は日向に、後半は柿木に居住したものだと思はれる」とする。これらは前掲の『増訂豆州志稿』に基づいたものであるが、前述したとおり、先の伝承史料からは、狩野氏の移住の時期を導くことはできないし、また、茂光も前半と後半に分かれて住んだとの記述もない。しかし、この沼館氏の説が定説になり、現在に至っていると思われる。

1970年代になり、日向館に初めて発掘調査のメスが入られることになった。最初の発掘調査は1979年に修善寺町教育委員会によって行われた。調査担当者は加藤学園考古学研究所の小野真一氏他であった。これは、県営圃場整備事業に伴う調査であり、3～4月に予備調査（第1次調査）を行い。12月に道路が敷設される部分の本調査を実施している（第2次調査）。残念ながら、この時の調査成果は、現状では全く公にされていない。ただ、当時新聞報道された記事があり、他の刊行物等でわずかに触れたものもある。今回の調査に関連して、伊豆市教育委員会より、当時の資料の提供を受けたので、それらを踏まえた上で記述する。

第1次調査は、遺跡の有無等を確認するための確認調査であった。昭和54年4月6日付の新聞記事（静岡新聞）では「狩野氏居館跡は決定的 予備調査で早くも自信」というタイトルで調査成果について触れている。「平安時代末から鎌倉初期、中国の宋から伝来した青磁や白磁などの陶磁器を多量に確認、さらに柱穴を数カ所で発掘した。また、スズリ、武器に使用したと思われる鉄器片も見つかって」と記載されている。

この調査の成果を踏まえた上で第2次調査が行われた。当初は全面調査の予定であったが、盛土を行って圃場整備を行う方法に変更したため、道路が敷設される部分の調査になった。

1981年に静岡県教育委員会により、『静岡県の中世城館跡』が刊行された。ここでは、「静岡古城研究会原図による」として、「日向館見取図」が掲載された。これによれば、主軸を南西－北東方向に向けて方形の台状の高まりが見られ、北東と南西辺には谷状の窪地が描かれている。ただし、この窪地は狩野川に合流する自然の谷と見れないこともない（南西の方の谷には小川も描かれている）。しかし、現在に至るまで「日向館」の見取図は公表されておらず、圃場整備以前の旧地形を知るための貴重な資料である。

1992年には包蔵地内の住宅建設に伴い、尾形禮正氏を担当者として町教委の調査が行われた。これも結果については公開されていないが、市教委から提供を受けた資料によれば、盛土の下はすぐに地山（自然礫層）になり、遺物・遺構ともに検出されなかったとされている。

以上述べてきたように、日向館については、発掘調査は行われているが、未報告で詳細不明であり、今回の報告が実質的に初めての発掘調査報告になる。また、文献史料も本遺跡に即していえば確定的なことは言えず、今回の調査報告が待たれていた次第である。

註

- (1) 秋山富南編。1800（寛政12）年に完成。ここでは静岡県立中央図書館蔵の写本復刻版（秋山2003）を参照、引用した。
- (2) 萩原正夫が『豆州志稿』に追記し、『増訂豆州志稿』として、1895（明治21）年に出版した。これにより『豆州志稿』が増訂版ながら、広く知られることになった。ここでは、戸羽山瀚の修訂編纂のもの（戸羽山1967）を参照、引用した。
- (3) 永禄2年の日付をもつ、後北条氏の一門と家臣の役高を記述した台帳。杉山博の校訂本を参照、引用した（杉山1969）。

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境

日向館は、北伊豆の狩野川流域の河岸段丘上に位置する。伊豆半島北部第一の河川である狩野川は天城山地の北西斜面を水源地とし、多くの支流をまじえて駿河湾に注ぐ。大仁付近を境にして、上流は川沿いに狭小な沖積低地が存在し、下流には田方平野が広がり多くの氾濫原や自然堤防が存在する。

日向館は、上流の地域でも比較的田方平野に近い箇所に立地する。大見川の合流点から旧天城湯ヶ島町松ヶ瀬地域までは、低地部分は比較的広く、小盆地状の地形となっている。今回調査した日向館はこの小盆地状の地域の縁辺部に存在する河岸段丘上に位置する。遺跡の西側は至近距離で狩野川が蛇行しながら北流し、東側は天城山系の山地の山裾が迫っている。日向館は、調査箇所において標高67～68メートルであり、遺跡内は高低差がほとんどなく、平坦な地形である。狩野川の現河道の標高は遺跡付近で53メートル程度であり、比高差は約15メートルである。遺跡の西側は、蛇行する狩野川により侵食を受けた部分もあり、ここでは、河川敷まで急崖となっている（第2・3図）。

第2節 歴史的環境

日向館周辺には縄文時代から近世・近代に至る遺跡が存在し、重要遺跡も少なくない（第3図）。紙数の関係もあり、本節では今回の調査に関連した時代（中世～近世）にほぼ限定して記述する。

本遺跡の存在する地域は、先述したように小盆地状の地形を呈しており、その周辺の山地部分も含めて中世～戦国時代の城館遺跡がやや多く分布する。発掘調査が行われた遺跡はごく少ないが、本遺跡と直接関連するので、以下において若干詳細に記述する。

小盆地状の地形である本地域の南端部には、当地域の山城で最も著名な狩野城が位置する（第3図35（以下全て第3図なので番号のみ記述する））。現在、曲輪、土塁、堀切が良好に残存している（加藤他編 2009）。第1章で述べたとおり、日向館を本拠にしていた狩野氏がここに移り、拠点としたという伝承が残されている。現状では、構築時期を明確にすることは困難だが、「現況への改修は、伊豆国が〔豊臣氏に対して…木崎注〕前線となる天正半ば以降に施されたのであろう」（前掲書）という評価がある。

狩野城より下流の西岸には、同じく山城の^{おおだいら}大平城 I がある（34）（註1）。「城ノ腰」、「馬場」の地名から城跡に比定されたが（静岡県教委、1981）、踏査記録も管見の限り見当たらず、実態不明である。更に北側の低地部分には、現国道136号線に面して、大平館がある（33）。後世の文字資料や、「^{みとのがはら}道芦原」の字名（「御殿原」に通ずる）などから、古い時期に北条幻庵（北条早雲の第三子）及びその養子の武田七郎氏秀が住んだ館に比定されたが、明証を欠く。むしろ注目すべきなのは、大平館比定地に隣接（同一？）する大塚遺跡（32）の調査成果である。縄文時代の敷石住居跡や墓坑を伴う集落遺跡として有名な遺跡であるが、狩野川に近い段丘面の端部近くより中世墓と円形土坑が検出されている。墓はローム層を掘り窪めた中に石を集中させた集石墓の可能性の高いものであり、銭貨6枚と人骨・歯が検出された。銭は不明のものを除けば開元通宝と大定通宝（初鑄：1178年）である。このほか墓の周辺より中世陶器と銭が出土している。銭は開元通宝と元豊通宝（初鑄：1078年）がある（小野他 1981）。

日向館から約1km北西の狩野川左岸の城山が、『太平記』などに登場する修善寺城である（3）。鎌倉公方足利基氏と対立した伊豆国守護の畠山国清が立て籠もったが、狩野介等も味方につけることができ



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	日向館	中世	16	柏久保城	中世	31	滝頭	縄文	46	上村	縄文
2	東小学校	縄文	17	柏久保	旧石器・縄文・弥生	32	大塚	縄文	47	前の沢	縄文
3	修善寺城	中世	18	桜台	縄文	33	大平館 I	中世	48	欄ヶ平	縄文
4	飯塚	縄文・弥生・古墳	19	中原 I	中世・近世	34	大平城	中世	49	大山	縄文
5	平平	縄文	20	中原 II	縄文	35	狩野城	中世	50	奥原	縄文
6	仲林	縄文	21	加殿城	中世	36	狩野塚	古墳	51	熊ヶ洞	縄文
7	荒久	縄文	22	子神社	古墳	37	大見城	縄文・中世	52	下荒区	縄文
8	小室	縄文	23	田代館 II	中世	38	梅木	古墳	53	入谷平	縄文
9	大林	縄文	24	田代館	中世	39	法華堂	縄文	54	池ノ本	縄文
10	吉田館	中世	25	田代城	中世	40	八幡館	中世	55	立間	縄文
11	城内	縄文・古墳	26	小山田	縄文	41	城城	中世	56	八久保	縄文
12	向原	旧石器・縄文・古墳	27	小山田上	縄文	42	八田館	中世	57	新野前	縄文
13	御社	縄文・古墳	28	謡畑	奈良・平安	43	長池	縄文	58	年川前田	縄文
14	牧之郷館	中世	29	池ノ上	縄文・弥生・奈良	44	合間原	縄文			
15	馬場	縄文	30	奥野	縄文・古代	45	上白岩	縄文・近世			

第3図 周辺遺跡分布図

ず、1362年に落城した。踏査記録によるならば、城郭関係の遺構は未確認であり、城としてほとんど造作をしなかった可能性が指摘されている（加藤他編 2009）。狩野川と大見川の合流点の東側、大見川北岸の愛宕山には、柏久保城が存在する（40）。土塁と堀切が残存し、後北条氏の手が入ったことが指摘されている（前掲書）。現存する文献資料によれば、明応年間（1490年代）に伊豆国の平定過程にあった北条早雲と狩野氏及び伊東氏との間でこの城をめぐる攻防があったことを伝えている。

大見川の南岸で柏久保城の対岸の位置の河岸段丘上には、加殿城（21）がある。「山裾に上城、中城、下城、中丸梶谷等の地名が残るが、遺構は不明」（静岡県教委、1981）とされる。重要なのは、この加殿城の真北の近接地で、大見川に面した一段低い段丘上に存在する中原Ⅰ遺跡である（19）。ここからは、圃場整備工事の際、多量の銭貨のほか陶器、かわらけが採集されている。工事中の発見、採集のため詳細は不明であるが、銭貨は723枚がまとめて採集されており、これ以上存在したと思われるが、旧伊豆国での出土銭貨中、一ヶ所からの最多出土数である。開元通宝以降の各種の銭があるが、永楽通宝が最も多く（143枚）、北宋銭の元豊通宝がそれに次ぐ（68枚）。北宋銭と南宋銭を始めとして、バラエティに富んでいる。ただし、古寛永銭が1枚含まれているので、埋納（遺棄？）されたのは17世紀以降である。また、これらの出土遺物を、遺跡の西側に現存する日蓮宗妙国寺と関連づける見解もある（尾形他 1978）。

以上で本遺跡近隣の中・近世についての記述を終えるが、総括するならば、本遺跡周辺では、中世～戦国の城館遺跡はかなり多く、恐らくは軍事的に重要な地域であることが想定できる。また、発掘調査は、中・近世に限ればほとんど行われておらず、実態不明の部分が極めて多いことが指摘できる。

次に本遺跡から若干離れるが、本報告書の作成にあたって重要な遺跡をあげておく。1つは、修禅寺である。修禅寺の創建については不明であるが、空海が修行したという伝承が『今昔物語集』、『元亨釈書』にあるが、確実ではない。確実な史料が現れるのは12世紀末からである。1204年に当寺に幽閉されていた前将軍の源頼家が北条氏によって殺害されるという著名な事件がおこる。また、本尊の木造大日如来像は、胎内墨書から1210年に実慶によって制作されたことがわかり、国指定重要文化財である。当初は真言宗であったが、1275年に鎌倉建長寺開山の蘭溪道隆により、臨済宗に改宗している。鎌倉時代末期は衰退した可能性があるが、南北朝期に足利氏から所領を与えられ、さらに戦国期には後北条氏の尊崇を受け、寺領を与えられるようになる。北条早雲の縁者である隆溪により曹洞宗に改宗するものこの頃である。以上のように修禅寺は当時の支配者の庇護を受け、当地域の中心的な寺院であった。

最後に、当地域で唯一発掘調査が行われた城郭遺跡である大見城跡（37）についてふれておきたい。旧中伊豆町に所在する大見城は、狩野川と大見川との合流点より直線で約6km南東の地点、大見川と支流の冷川の合流地点に張り出す城山とその周囲の平坦な河岸段丘部分に位置する。ここは修善寺と伊東を結ぶ交通上の重要地点である。城山部分において発掘調査は行われていないが、空堀と土塁が残存し良好な保存状況にある（加藤他編 2009）。発掘調査は河岸段丘部分で行われ、中・近世の遺構として土坑14基、小穴群、溝状遺構が検出されている。報告者は、小穴群の配置等の点から、掘立柱建物5棟、柵列4列を想定し、その中のいくつかを城と関連する遺構（根小屋）と推定している。中・近世の遺物はほとんどが遺構外の出土であるが、16世紀中頃～17世紀前半の瀬戸・美濃系陶器のほかに、14世紀の龍泉窯系の青磁、江戸時代の陶磁器、志戸呂産及び堺系の播鉢が出土している。この他、銭貨の出土もあり、開元通宝、紹聖元宝（初鑄：1094年）、古寛永銭、第2期寛永銭が発見されている（静文研 1997）。

前述したが、明応年間に柏久保城をめぐる、北条早雲と狩野氏等との間で攻防が行われた際、「大見三人衆」が早雲側に立って活躍した（小和田 1991）が、この「大見三人衆」の拠点と考えられるのが大見城である。大見城については「明らかに戦国期の改修が指摘でき」、後北条氏の滅亡ま

で城として機能していたとしても問題ないとする評価（加藤他編 2009）もある。

註

- (1) 『静岡県の中世城館跡』（静岡県教委、1981）によれば、大平城Ⅰとともに、その近隣に大平城Ⅱを想定している。「大城」、「前大城」の字名から推定したものだが、図上で位置が明示されず判然としない。『静岡県文化財地図Ⅰ』、『静岡県文化財地名表Ⅰ』（ともに静岡県教委 1988）にも記載がないため、ここでは省略した。

第3章 遺跡の概要

第1節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査区をA～D区に分け、平成20年度はA区とB区、平成23年度はC区とD区の発掘調査を実施した。

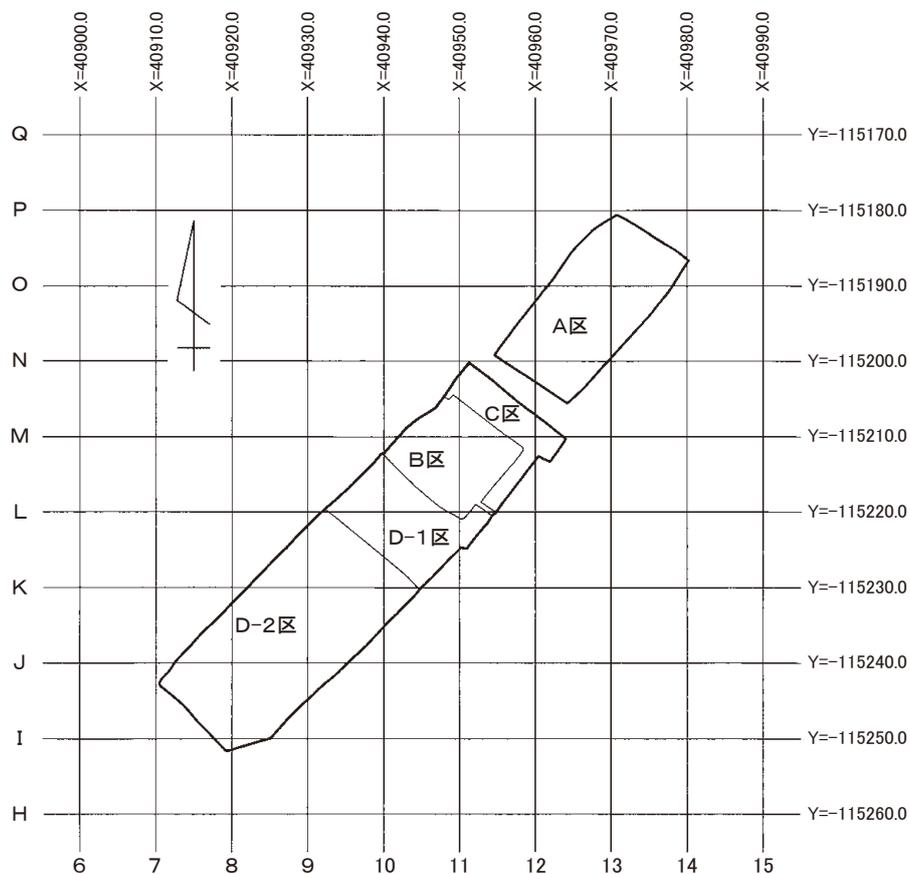
調査の便宜上、平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標日本測地系（改正前）の軸線を基準に10m×10mのグリッドを設定した。グリッドには南から北へアルファベット、西から東へアラビア数字を付した（図4）。

平成20年度調査、平成23年度調査ともに、第Ⅰ層から第Ⅲ層までを重機で掘削し、遺物包含層である第Ⅳ層を人力で掘削した。第Ⅴ層上面で遺構を検出し、掘削した。Ⅵ・Ⅶ層上面でも遺構確認を行い、Ⅶ層下面まで遺物包含層のため、人力掘削を行った。

(2) 調査の経過

i) 平成20年度

静岡県教育委員会文化課職員の立会いのもと、A区の表土除去作業を行い。平成20年9月24日からA区の人掘削作業を開始した。当初は排水対策と土層確認のため4本のトレンチを掘削したが、10月9日から包含層の掘削作業と遺構検出作業に着手した。22日より検出された溝状遺構S D01及びS D02の



第4図 グリッド配置図(1:1000)

調査を行い、11月26日に終了した。その他杭列の調査や測量作業を行い、12月4日にA区の調査を終了した。5日より埋め戻し作業を行った。

B区の表土除去作業は、A区埋め戻し作業終了後の12月16日～18日まで行い、24日から包含層の人力掘削を行った。平成21年1月14日からV層上面での遺構検出作業及び遺構掘削作業を開始した。27日に遺構掘削作業が終了し、Ⅵ・Ⅶ層の掘削を引き続き行った。2月12日に人力掘削作業は全て終了し、2月20日より現場事務所等の撤去作業を開始した。

ii) 平成23年度

発掘調査

6月1日から重機による表土掘削をセンター職員立会のもと開始した。7月4日からによる人力掘削を開始した。遺構から出土した遺物は遺構ごとに、包含層から出土した遺物はグリッド単位で取り上げた。遺構図面の作成は(株)シン技術コンサルに委託し、主に同社が開発した「遺跡管理システム」を用いて実施した。遺構写真は中判カメラを使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。C区、D区(北側部分のみ。D-1区と後に呼称)の遺構密度が高かったことから、前回調査されていなかったB区の東側も拡張してC区の一部として掘削した。8月10日にラジコンヘリによる空中写真撮影と写真測量を実施した。その後、整地層と考えられる土の堆積状況を確認するため、第Ⅷ

第1表 工程表

	年	平成20年										平成21年		
	項目/月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
現地調査	準備工・撤去工					■	■						■	
	A区人力掘削						■	■	■	■				
	B区人力掘削										■	■		
	記録・写真								■	■	■	■		

	年	平成23年										平成24年		
	項目/月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
現地調査	準備工・撤去工	■	■	■	■			■						
	C区人力掘削				■	■	■	■						
	D区人力掘削				■	■	■	■						
	記録・写真				■	■	■	■						
資料調査	調査準備等							■	■					
	整理等作業								■	■	■	■		
	報告書作成											■	■	
	保存処理									■	■	■	■	
	自然科学分析										■	■		

層上面まで人力で掘削した。9月14日、2度目のラジコンヘリによる空中写真撮影と写真測量を実施し、現地調査は終了した。

9月15日から9月20日まで基礎整理作業として、遺物洗浄、注記、図面整理、写真整理を実施した。

資料調査

11月2日から調査報告書作成のための資料調査を開始した。遺構図面は現地測量業務委託の納品物である（株）シン技術コンサルの「遺跡管理システム」のデータを原図として用い、Adobe Illustrator CS3またはハンドトレースで清書した。遺物は接合、復原の後、実測可能なものを抽出、分類の後実測した。遺物実測図は版組の後、ハンドトレースで清書した。

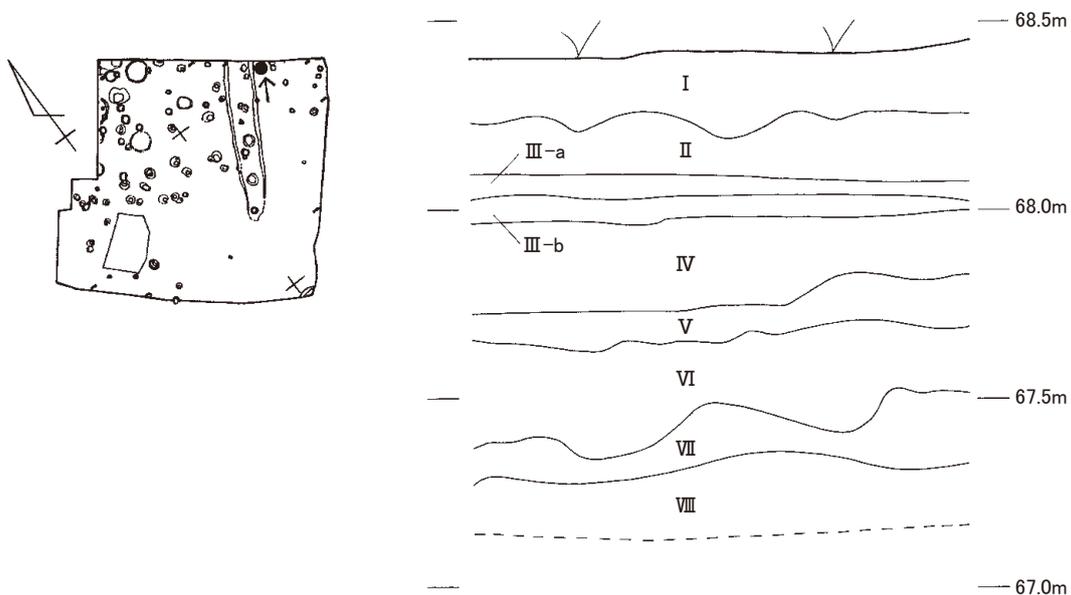
12月2日に遺物写真撮影を実施した。中判カメラを使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。

木製品は、12月13日に東北大学教授鈴木三男氏による樹種同定のための試料採取を実施した。その後、真空凍結乾燥法による保存処理を施した。

2月6日をもって、報告書作成にかかる作業を終了し、印刷・製本にかかる作業を開始した。

第2節 基本土層

今回報告する調査区は東北～南西方向に長く、地点ごとに土層の堆積状況がかなり異なっている箇所もある。そこで、中央に位置するB区の北壁を標準土層に定め、各層についてはローマ数字で表記する（図5）。各地区の土層のうち標準土層と異なる個別の層についてはアラビア数字で表記する。個別の層については、各断面図（第6～8図）を参照のこと。



第5図 基本土層図

I層：褐色土。極めて新しい時期の盛り土である。

II層：褐灰色土。耕作土の上部。

III-a層：暗褐色土。耕作土の中部。赤褐色の粒子を非常に多く含んでいる。

III-b層：暗褐色土。耕作土の下部。

IV層：黒褐色土。遺物包含層

V層：暗褐色土。整地層の上部で、遺物包含層でもある。径2～8mm程度の白色粒子を非常に多く含む。

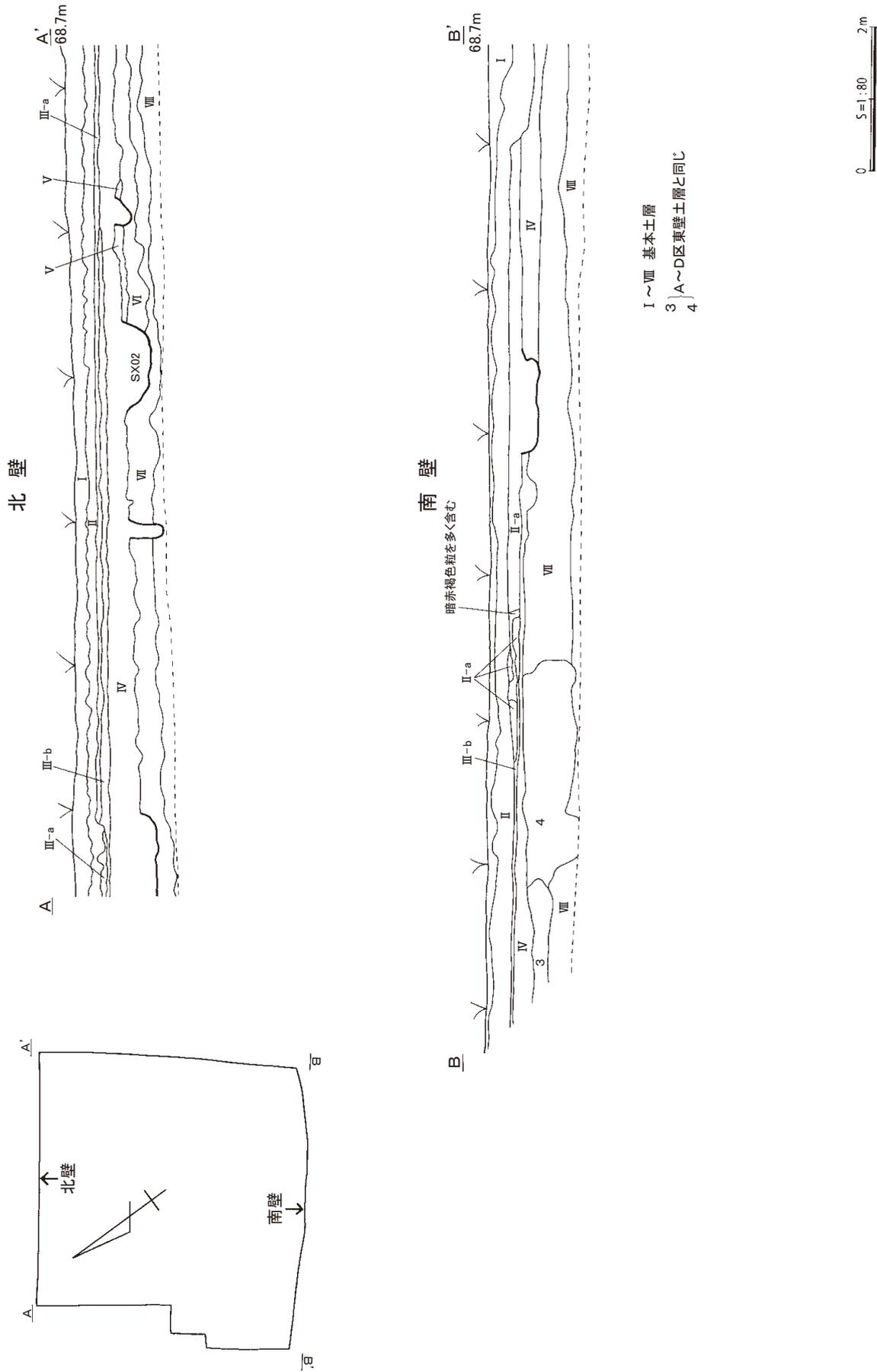
VI層：暗褐色土。整地層の中部で、遺物包含層でもある。

VII層：にぶい黄褐色土。整地層の下部で、遺物包含層でもある。径20～30mm程度に固まった白色の粒を含む。

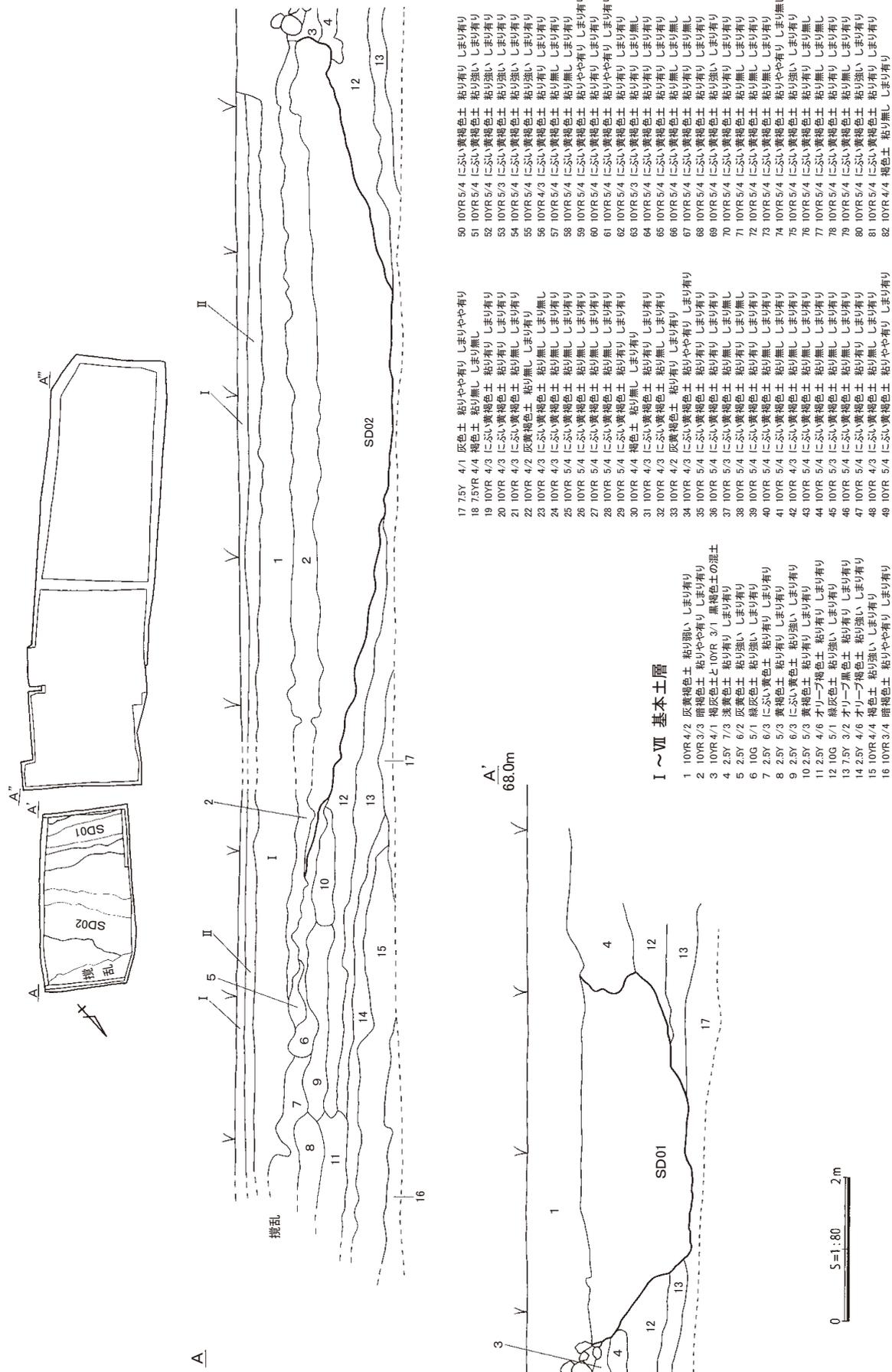
VIII層：にぶい黄褐色土。整地層ではなく、無遺物層である。

このうち遺構検出作業はV、VI、VII層上面でそれぞれ行った。

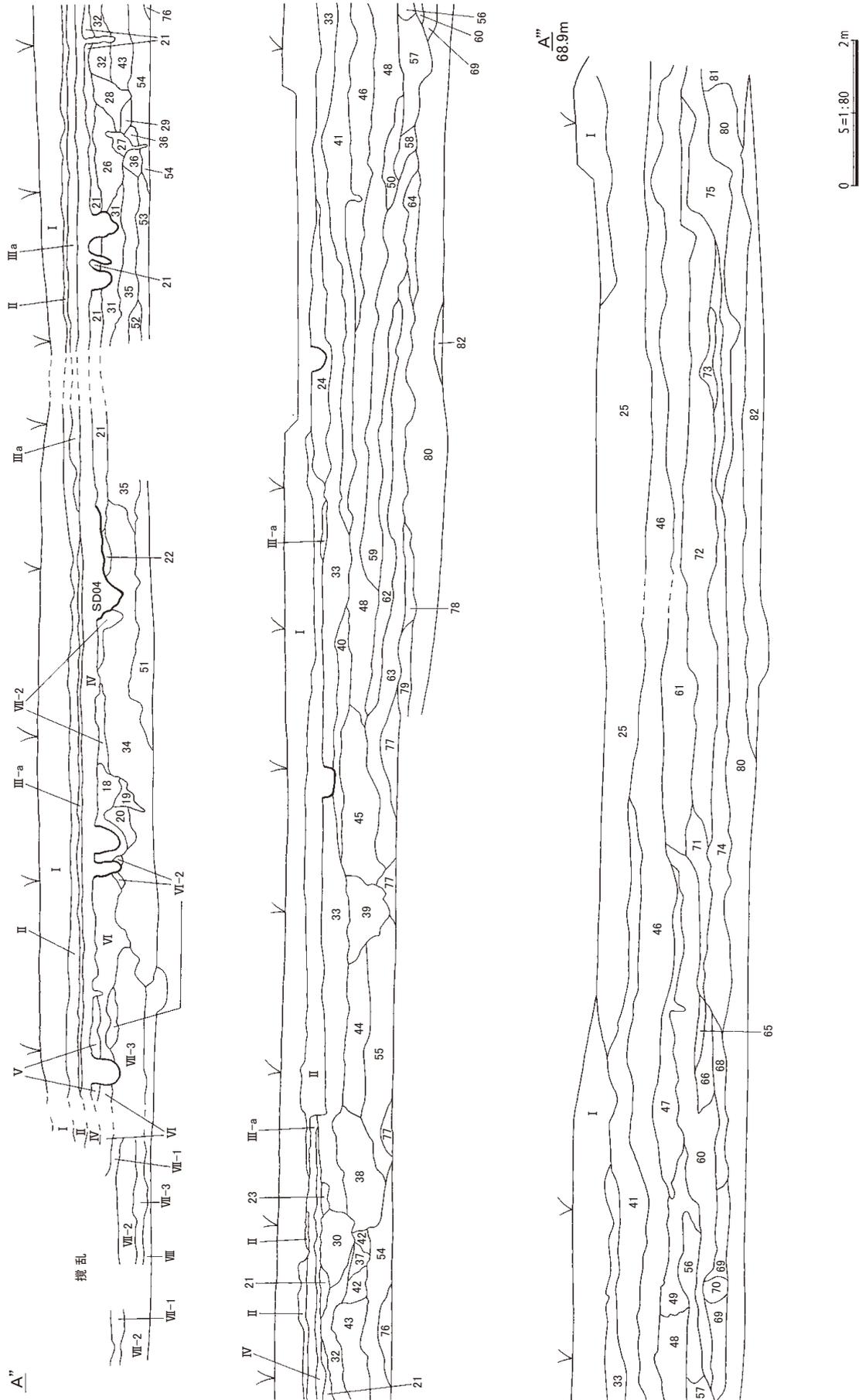
なお第6～8図ではアラビア数字を用いて表記している層が多数存在するが、それらは標準土層にあてはまらない自然堆積層であり（遺構の覆土等は除く）、個々の土層説明は極力省略した。



第6図 B区北壁・南壁土層断面図



第7図 A~D区東壁土層断面図(1)



第8図 A~D区東壁土層断面図(2)

第4章 調査の成果

第1節 遺構

(1) 遺構の概観（第9～12図）

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡（SB）1基、溝状遺構（SD）4基（流路の可能性のあるものを含む）、土坑（SK）34基、小穴（SP）148基、不明遺構（小穴を伴う溝及び橋状遺構）（SX）各1基、杭列1基である。

遺構の分布状況だが、大半の遺構は中央のC、B、D区（北側のみ。D-1区と呼称する）に集中する。A区は溝状遺構と橋状遺構及び杭列のみであり、土坑及び小穴が存在せず、ここに建物等が存在した証拠を見出すことができない。D区の南側（D-2区と呼称する）には遺構、遺物等が存在せず、遺跡の範囲外と考えられる。なお遺構が集中するB、D-1区にも遺構の空白部分が存在する。以下項目ごとに述べていきたい。

(2) 掘立柱建物跡（第13図）（図版7-1）

今回の調査では1棟のみ検出された。1間×1間の掘立柱建物である（SB01）。D区K-10グリッドで検出された。平面形は若干歪んだ長方形を呈し、建物の方向はN-28°-Eである。規模は桁行2.3m、梁行1.6mで、面積は3.68㎡である。柱穴の平面形状は円形、不定円形、隅丸長円形で、深さは平均で27cmである。柱穴から遺物の出土はない。

(3) 溝状遺構

今回の調査では4基の溝状遺構が検出された。A区で2基、C区では2基で、それぞれ規模や形状が異なるので、個別に述べて行きたい。

i) SD01（第14図）（図版4-1）

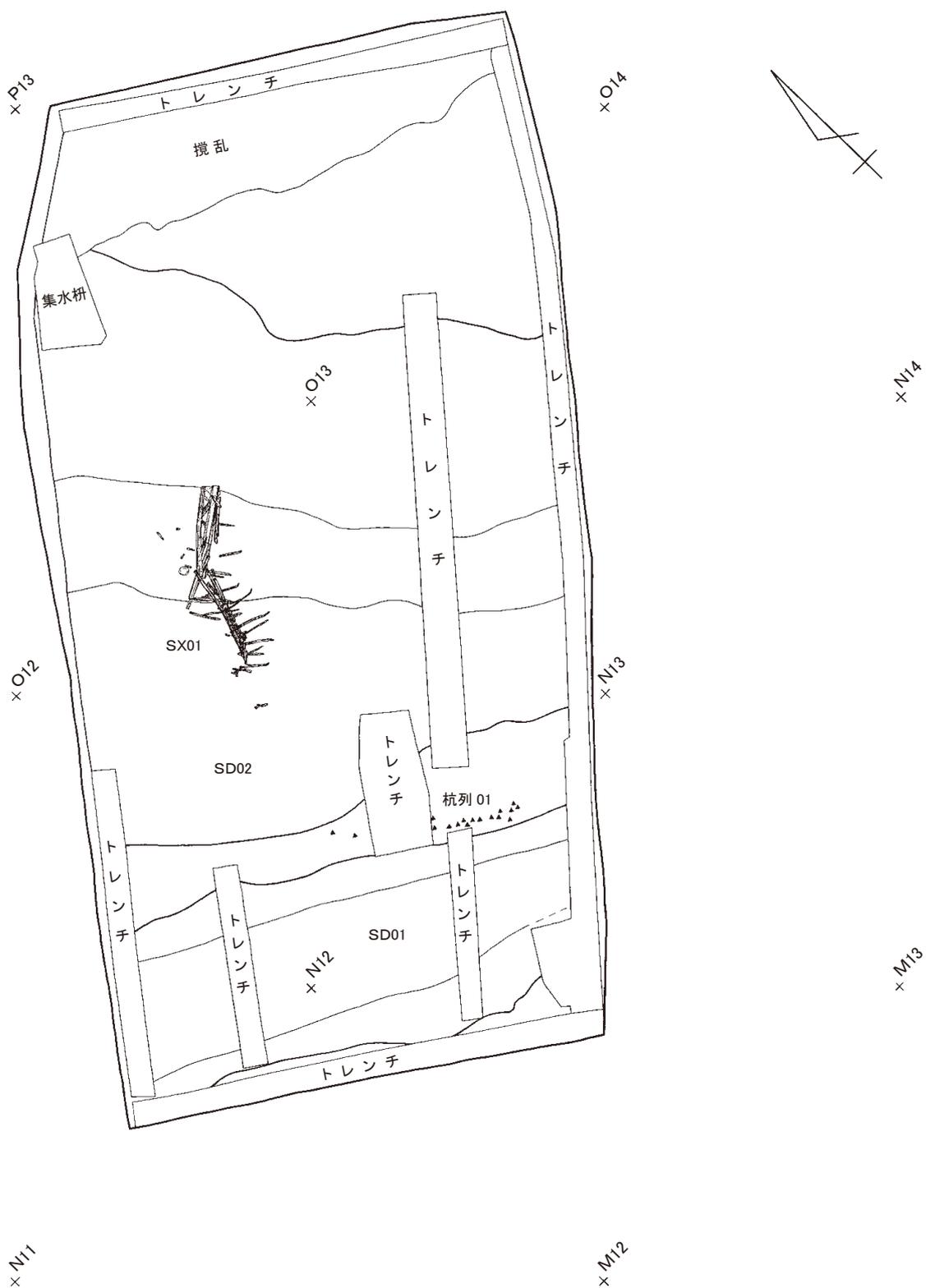
A区N-11・12及びM-11・12グリッドで検出された。幅は上端で3.8～4.5m、底面幅は1.7～2.7m、深さは確認面より最大深95cmである。流路と思われるSD02及びB区のSD03とほぼ平行方向にあり、何らかの関連があると思われる。東壁土層断面図（第7図）を見る限り、3層上に礫の集中部分があり、溝と関連すると思われる。従って、3層より上の層から掘りこまれていると考えられる。SD02との先後関係は不明である（同図）。底面は平坦であり、断面形状は多少の乱れはあるが逆台形状を呈す。北側上端上には杭列01が存在し、SD01に伴うと思われる。

遺物は底面に近い部分やかなり浮いた位置からも出土している。後述するように、この溝から出土した遺物は、大半が15世紀のものであり、16世紀以降に明確に比定される遺物は出土していないことから、溝の時期もその時期と考えるのが妥当と思われる。

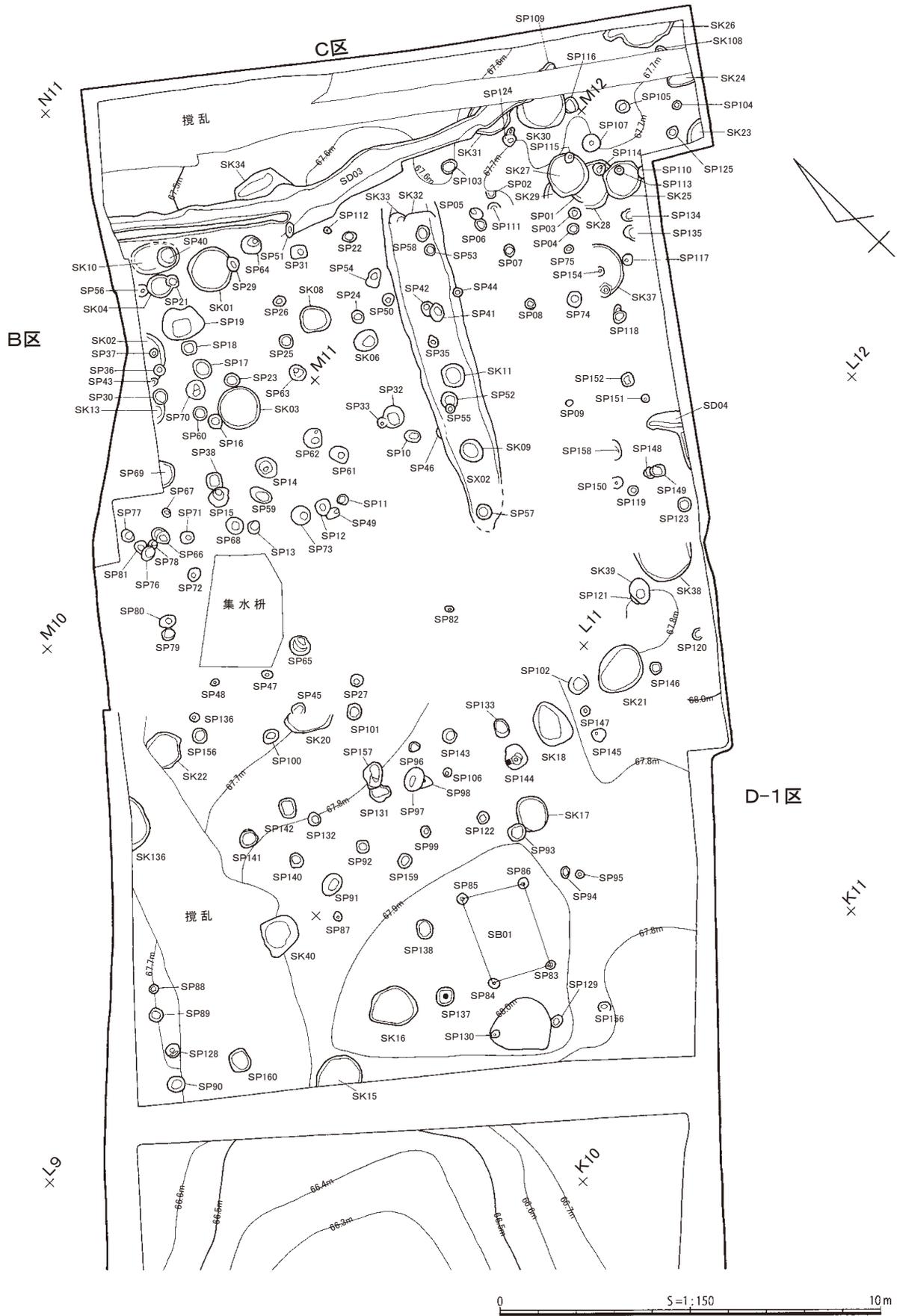
ii) SD02（第16図）（図版4-2）

A区N-11・12・13及びO-12・13グリッドで検出された。幅は上端幅で14.3～9.0m、下端幅は2.7～1.7mである。深さは確認面より最大深1.0m程度である。底面は明確ではなく、断面形状も人口的に掘削した痕跡がみられない。従ってこの溝は自然流路と思われる。ただし、この流路に伴って橋状遺構（SX01）が存在することから、人が橋状遺構を使用していた際に流路だったと思われる。

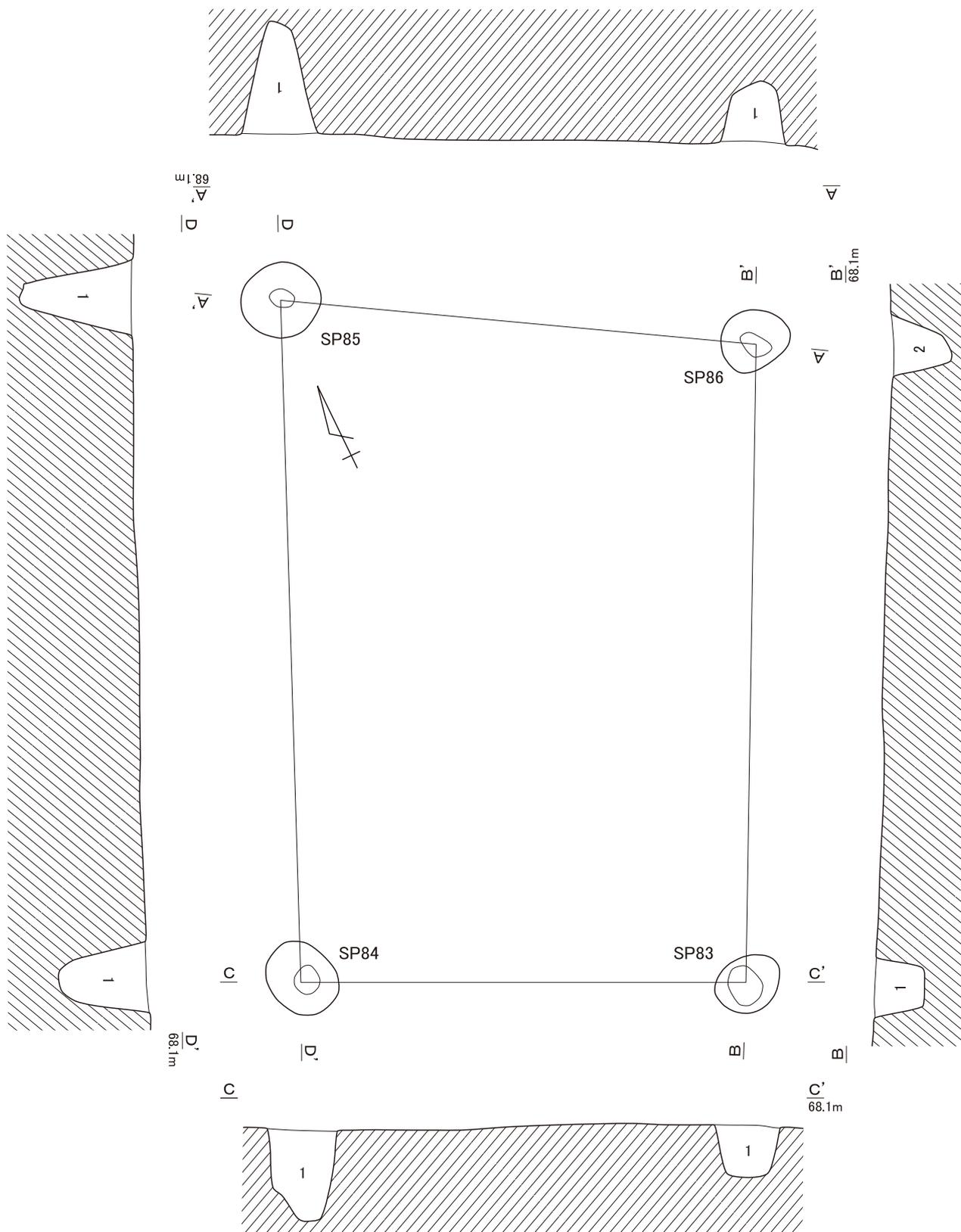
遺物は平面的には分布上の偏りを持ちながら出土した。時代の判明するものについては平安～鎌倉時代のものが出土している。それより明確に新しいものはないことから、この流路はその時期に埋まった可能性がある。



第11図 A区遺構配置図



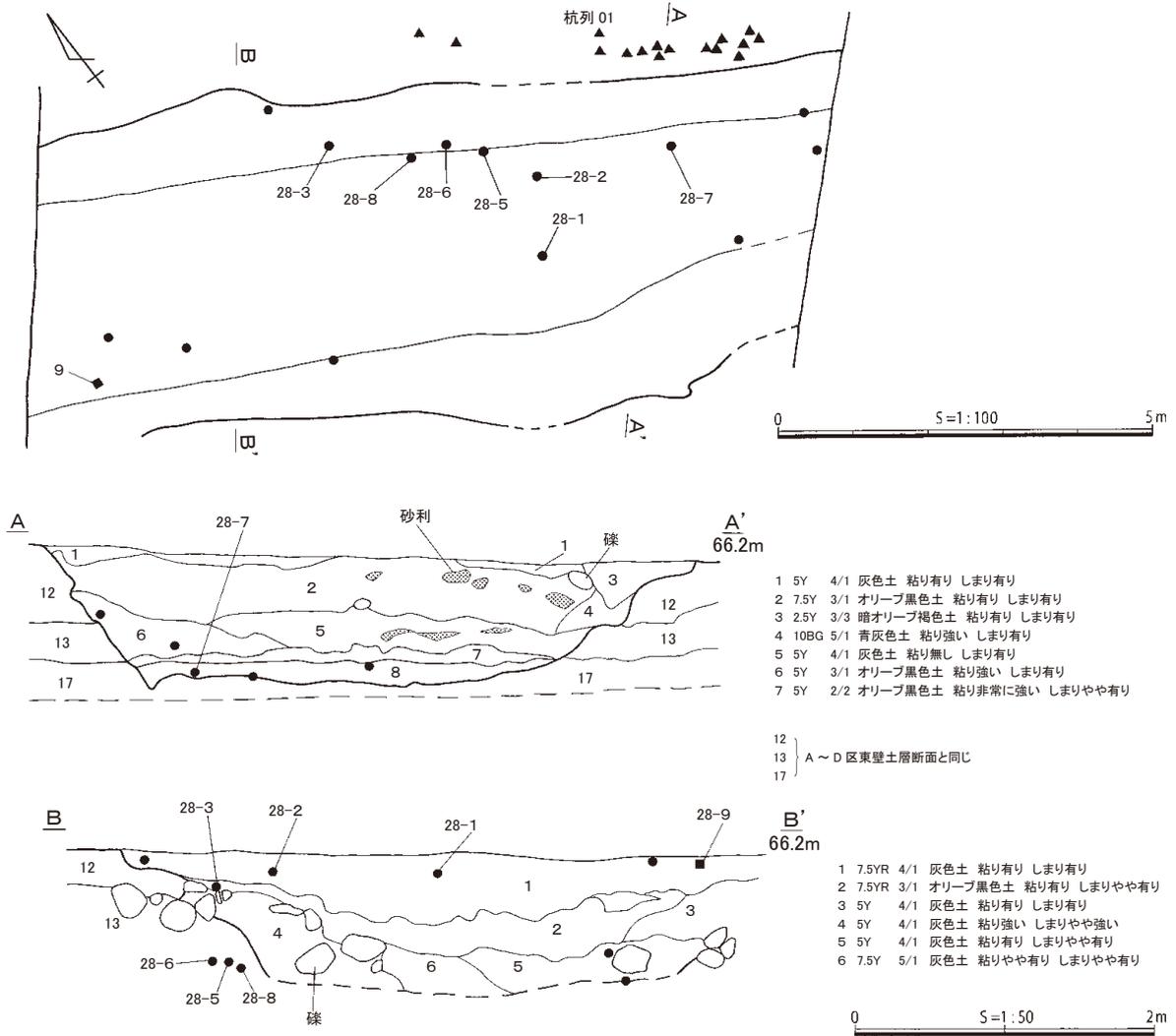
第12図 B・C・D-1区 遺構配置図



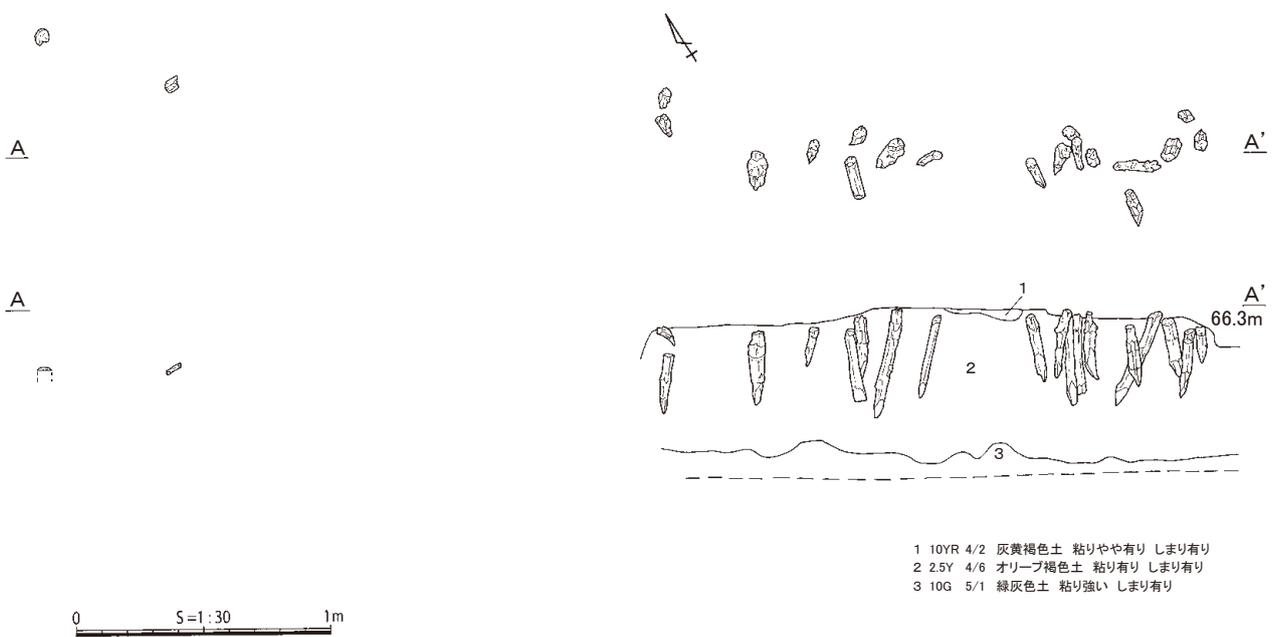
- 1 10YR 3/2 黒褐色土 粘り無し しまり有り
- 2 1に1cm大の炭化物粒少量混じる
- ・ 1～10mmの白色粒を多く含む
- ・ 1mmの酸化物粒を多く含む

0 S=1:20 1m

第13図 SB01平面・断面図



第14図 SD01平面・断面図



第15図 杭列01平面・断面図



第16図 SD02平面・断面図

iii) SD03 (第17図) (図版6-1)

C区M-10・11グリッドで検出された。東端は水道管の攪乱により破壊され、攪乱の北側には続く部分が検出されていない。西側はやや屈折する部分(S K34と切りあっている部分)から二又に分かれ、北西方向に走り調査区端に至る。二又に分かれた南側の部分はB区に一部またがると思われるが、B区側ではこの溝の続きは検出されていない。

幅は二又に分かれる部分より東側では上端で1.3m～0.4m、下端幅は0.2～0.6m、二又に分かれる部分では上端で0.6m～0.4m、下端幅は0.4～0.2mである。極めて浅い溝であり、覆土も1層しか認められない。S K31やS K34を切って掘られている。

遺物はかわらけの小片や時期不明の播鉢の破片が出土しているが(図、写真は未掲載)、時期は決定できない。

iii) SD04 (第18図)

C区L-11グリッドで検出された。東側は調査区端で切られている。西北～南東方向に走る溝であるが、南側部分はテラス状に浅くなる、このテラス部分を除外すれば、幅は上端で最大幅0.5m、下端幅は10cm程度である。深さは確認できる部分において、35cm程度である。浅い溝であり、覆土も1層しか認められない。遺物はない。

(4) 土坑 (第19・20図) (第2表)

本遺跡では34基の土坑が検出されている。小穴との分離は外形の長径が60cm以上のものを土坑、以下のものは小穴とした。ただし多少の例外はあり、深度の深いものや、柱穴と考えた方が良いものについては、60cm以上の長径があっても小穴の方に入れたものがある。検出数が多いため、個々の遺構について記述せず、以下総論的に述べていきたい。

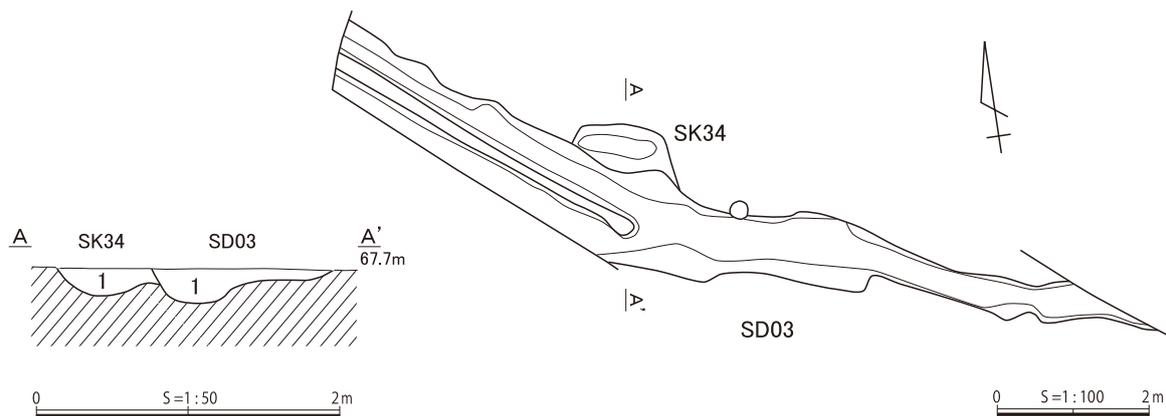
外形は円形を基調としており、明瞭に楕円形と言えるものは少ない。卵形を呈すものも若干認められる。方形を基調とするものは存在しない。確認面からの深さは40cm以上のものは1割強であり、25cm以下のものが全体の80%を占め、概して浅いと言えそうである。底面はフラットのものが大半を占める。壁の立ち上がりは急なものが多く、ほとんど垂直に立ち上がるもの(S K 8、17等)もある。断面形が逆台形を呈すもの(S K32)もある。

覆土については多くのものが1層のみであり、深いものには2層以上に分けられるものがある。色調については黒褐色ないし暗褐色で、いわゆる黒い土である。多くの層に分けられるものはS K32以外にはない。

遺物(礫含む)は10基から出土し、全体に占める割合は30%である。遺物の出土がない土坑が約7割となる。遺物の大半は時期の特定できないかわらけの小片であるが、砥石が出土した土坑(S K06)や、炭化物の出土したもの(S K13)もある。

平面的な分布状況であるが、A区とD-2区には存在しない。それ以外の地区においても万遍無く検出されるわけではなく、群としてのまとまりが見られる。集中するのはC区のMラインと12ラインが交差する付近(1)、B区のM-10グリッドの東側とM-11グリッドの西側部分(2)、D区のNラインと12ラインが交差する付近(3)である。このほか集中度は弱いのがS K20、22、36のブロックとS K15、16、40のブロックも認識可能である。このうち、最も集中度が高いのは(1)であり、S K25、27、28、29は切り合っている(図版7-3)。これらの群在化した分布状況や、切り合いも見られることから、土坑の構築される箇所がかなり固定されており、ある程度の期間にわたっていたと言えるだろう。また、土坑の分布と、次に述べる小穴の分布が重なっていることも指摘できる。

以上の点を踏まえた上で、土坑の在り方について述べるならば、大半の土坑は静岡県東部で多く検出されるいわゆる「円系土坑」そのものか、それに類似していると指摘できる。また、その性格について



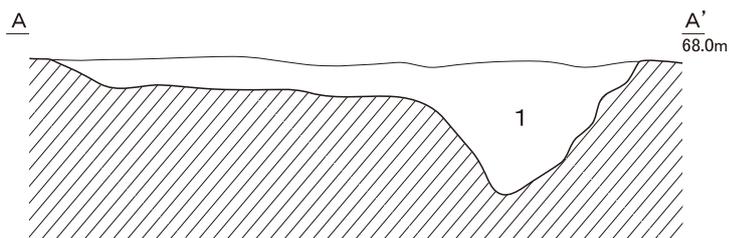
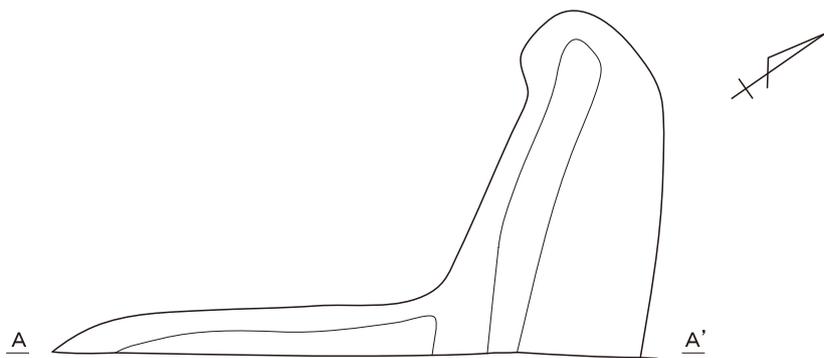
SK34

- 1 10YR 3/3 暗褐色土 粘り無し しまり有り
 ・ 1 ~ 10mm 大の白色粒を多く含む
 ・ 2 ~ 5cm 大の黄褐色土のブロックを含む

SD03

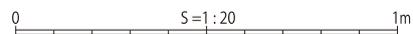
- 1 10YR 3/2 黒褐色土 粘り無し しまり有り
 ・ 1 ~ 10mm 大の白色粒を多く含む
 ・ 1mm 大の酸化物粒を少量含む

第17図 SD03 平面・断面図



SD04

- 1 10YR 3/1 黒褐色土 粘り無し しまり有り
 ・ 1mm 大の白色粒を多く含む



第18図 SD04 平面・断面図

述べるならば、大多数の土坑が墓穴であったと考えて良いと思われる（確認面からの深さが浅いものについては、掘り込み面が高く、上部が既に削られた状況で検出されたと考えられる）。更に推測を逞しくするならば、小穴と重複する点や、群在する点などより、個々の建物ひいては個々の屋敷地に伴う墓域とも考えられる。

土坑は全てを図示せず、図で不掲載のものについては第2表を参照されたい。

(5) 小穴（第21～25図）（第3表）（図版7）

本遺跡で148基の小穴が検出されている。土坑との分離は前項で述べたとおりである。数が多いため、ここでは個々の小穴について記述せず、以下総論的に述べていきたい。

外形は円形を基調としており、楕円形と言えものはやや少ない。方形を基調とするものも少数だが存在し、円形基調のものとの区別が重要である。確認面からの深さは50cm以上のものは15%強であり10～30cmのものが最も多いとみられる。最も深いものはS P 144の77cmである。底面にはさらにピットを穿つものも少数存在する（S P 15、64、68など）。底部に平たい石を据えるものもある（S P 17、93）。礎石と言って良いか疑問である。

覆土については1層のみのものが多いが、明らかに柱根の痕跡と見られものが観察できるものが、一定数存在する（S P 137、138、142、144、152、157など）。

礫を含む遺物をもつものかなり存在するが、礫を除けばかわらけの小片のみ（時期不明の瓦質土器が1点S P 128から出土している）であり、個々の小穴については細かい時期比定は困難である。

平面的な分布状況であるが、A区とD-2区には存在しない。それ以外の地区においては粗密があるが、かなり全面的に検出されている。ただし、分布上の空白部分が存在する。特に目立つのはB区の南側とD-1区の東壁側である。特に前者は周囲を土坑、小穴の密集した個所に囲まれており、注意すべきである。

以上の点を踏まえた上で、本遺跡での小穴の有り方について述べるならば、柱根の痕跡が認められないものを含めて大半の小穴は建物の柱なし柵であり、掘立柱建物の存在を認めることができる。柱筋が揃って建物と認定できるものは、既述のS B 01のみであるが、実数は不明ながら数棟の建物の存在は推定されよう。時期については比定が難しいが、明らかに時期が新しくなるもの（近世陶磁器など）が出土していない点などから、大半が溝状遺構S D 01と同時期と考えるのが適当だと考える。

小穴は全てを図示せず、図で不掲載のものについては第3表を参照されたい。

(6) 杭列01（第15図）（図版5-2）

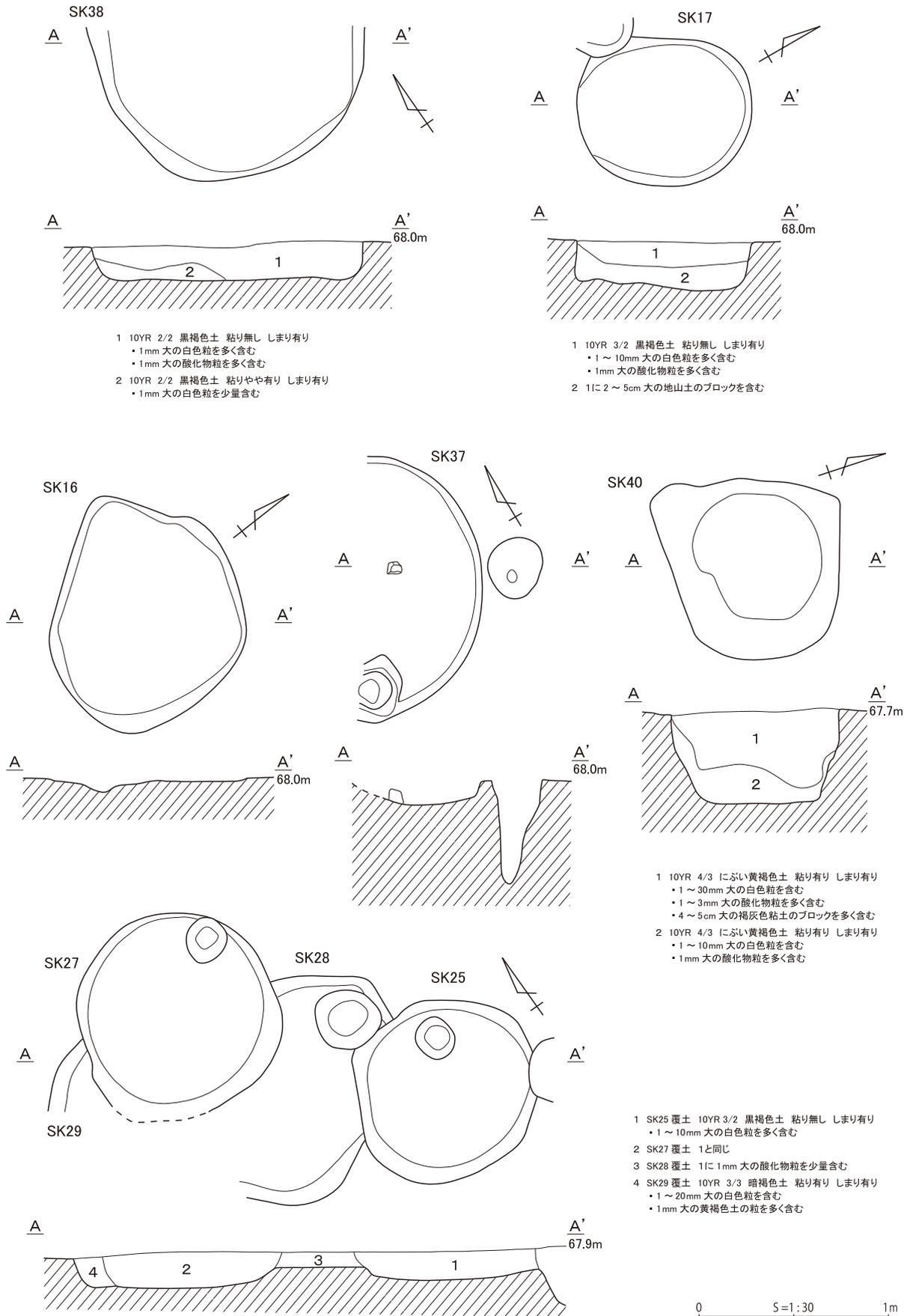
A区N-12及びM-12グリッドで検出された。S D 01の北側上端にそって一列に並ぶ杭列であり、明らかにS D 01と関連する遺構である。現状では杭は傾いて検出された。杭は全て下端部が尖っており、円錐形、二辺ないしそれ以上の面から削り込みを行って先端を尖らせている。杭の上側基部は全て切断されて平らになっている。杭の長さは15～45cmである。S D 01が埋没するのを防ぐ土留め杭列の可能性も考えられる。

(7) 不明遺構

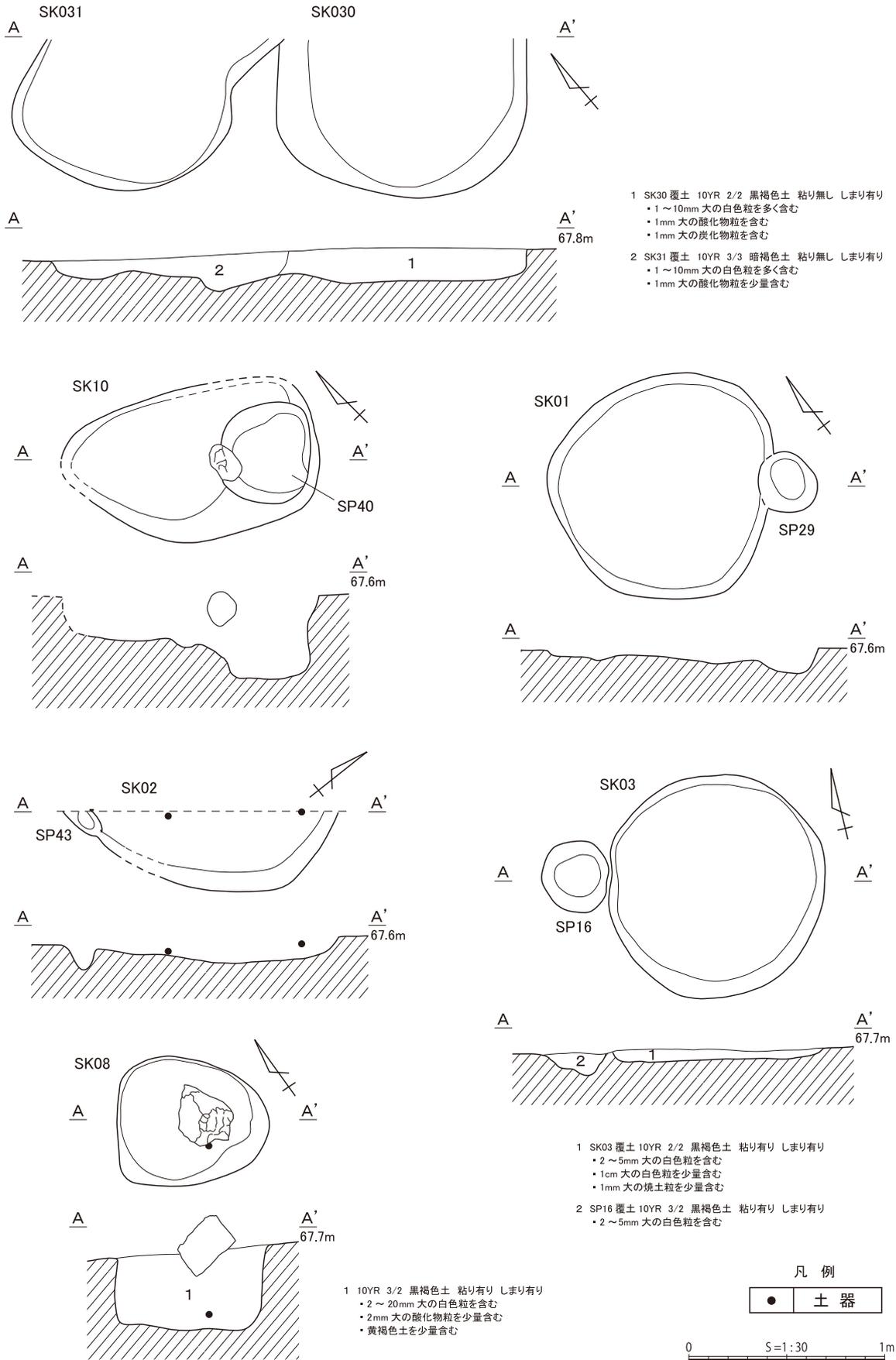
i) SX01（第26図）（図版5）

A区N-12及びO-12グリッドで検出された。当初は流路S D 02の中の堰のようなものを想定したが、むしろ橋と考えた方が適切だと思われるので、ここでは橋状遺構と仮称する。

全体は長く細い板材と杭状の細長い丸太材を組み合わせで作られている。板材は3～4本程度を並べ、踏み板としていられる。杭状の丸太材は橋桁と考えられるが、先端部は削って尖らせたものが大半である。先端が曲がっている（折れている）ものが多いのは、その部分が土に差し込まれていたと考えるのが妥当であろう。基部の大半は水平に切断されている。緊縛材と考えられるものは検出され



第19図 SK(土坑)平面・断面図(1)

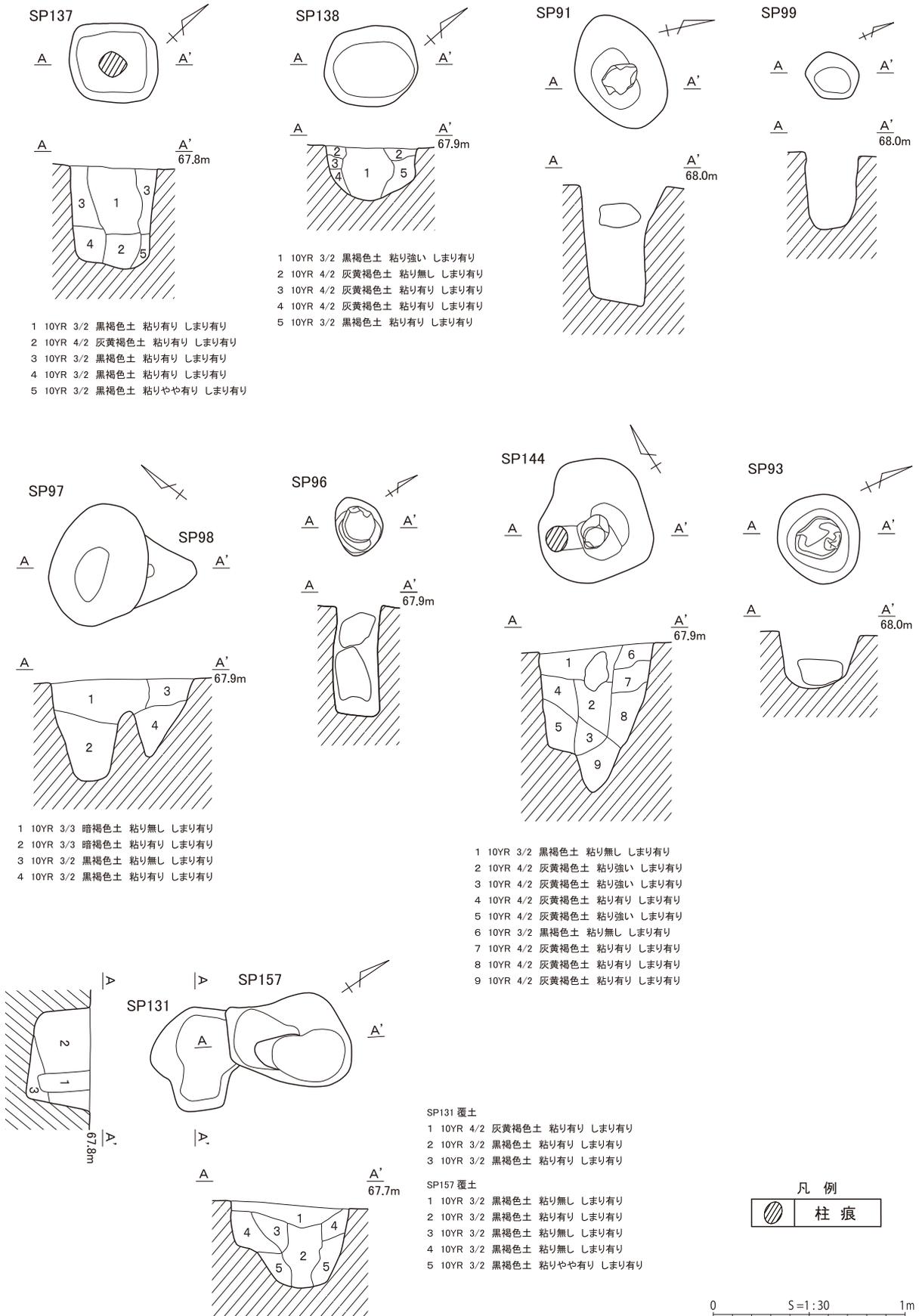


第20図 SK(土坑)平面・断面図(2)

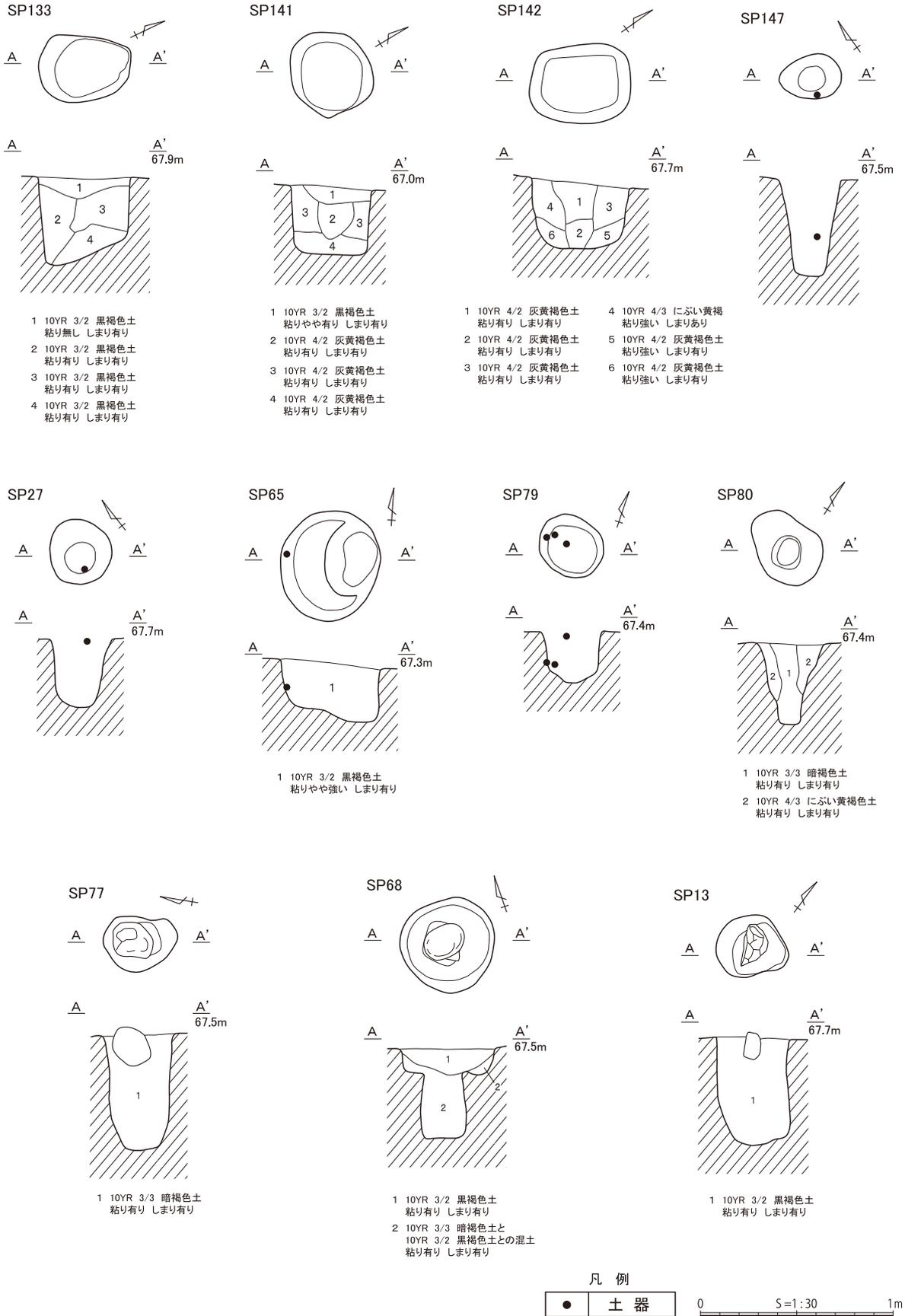
第2表 遺構計測表(1) 土坑

() は残存値

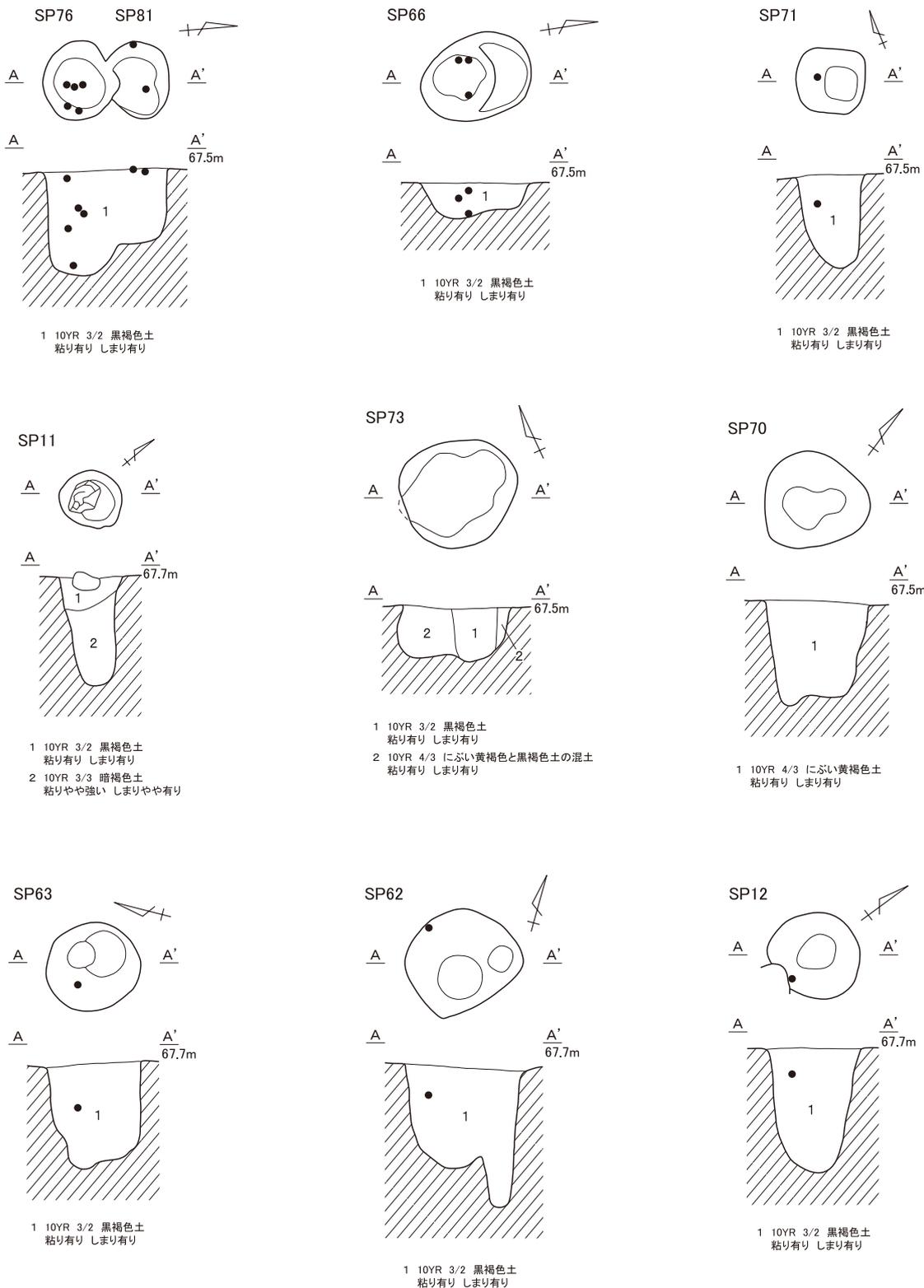
遺構名	グリッド	平面形態	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	切り合い関係
SK01	M-10、11	不整楕円形	122	113	9		SP29 と切り合う
SK02	M-10	不明	(121)	(40)	11	かわらけ 2片	SP36 に切られる SP43 と切り合う
SK03	M-10	円形	115	112	6		
SK04	M-10	円形	(66)	64	11	かわらけ 1片	SP21 と切り合う SP56 を切る
SK06	L-11	不整楕円形	68	52	58	砥石 1点	
SK08	M-11	卵形	78	67	43	かわらけ 1片 礫 1点	
SK09	L-11	円形	62	60	30		SX02 内で検出
SK10	M-10	卵形	(120)	76	25	礫 1点	SP40 と切り合う
SK11	L-11	不整円形	64	57	25	かわらけ 1片 礫 2点	SX02 内で検出
SK13	L-11	不明	(170)	-	(80)	炭化物	
SK15	K-9	不明	(70)	115	11	かわらけ 7片	
SK16	K-9、10	不整楕円形	127	105	8		
SK17	K-10	楕円形	96	78	25		SP93 に切られる
SK18	K-10	卵形	118	90	8		
SK20	L-10	不整楕円形	(126)	(47)	8		
SK21	K-10、11	楕円形	138	(95)	8		
SK22	L-9、10	不整円形?	(86)	91	6	かわらけ 5片	
SK23	L-12	不明	-	-	36		
SK24	L-12	不明	-	-	14	かわらけ 2片	
SK25	L-11	円形	104	100	15		SK28 を切る SP110 に切られる
SK26	L-12、M-12	不明	(185)	(62)	13		
SK27	L-11	円形	(115)	110	19		SK28、SK29 を切る
SK28	L-11	不明	122	-	8		SK25、SK27 に切られる
SK29	L-11	不明	-	-	16		SK27 に切られる
SK30	M-11	楕円形?	(80)	(126)	17		SK31 に切られる
SK31	M-11	不整楕円形?	(84)	(102)	19		SK30 を切る
SK32	M-11	不明	(82)	(16)	30		SK33 を切る
SK33	M-11	不明	(34)	(21)	25		SK32 に切られる
SK34	M-11	不明	132	66	19		SD03 に切られる
SK36	L-9	不明	(141)	(51)	24		
SK37	L-11	楕円形?	(143)	(63)	10		
SK38	K-11、L-11	不明	(147)	(82)	20		
SK39	K-11、L-11	楕円形	69	52	10		SP121 を切る
SK40	L-9	不整円形	97	91	48		



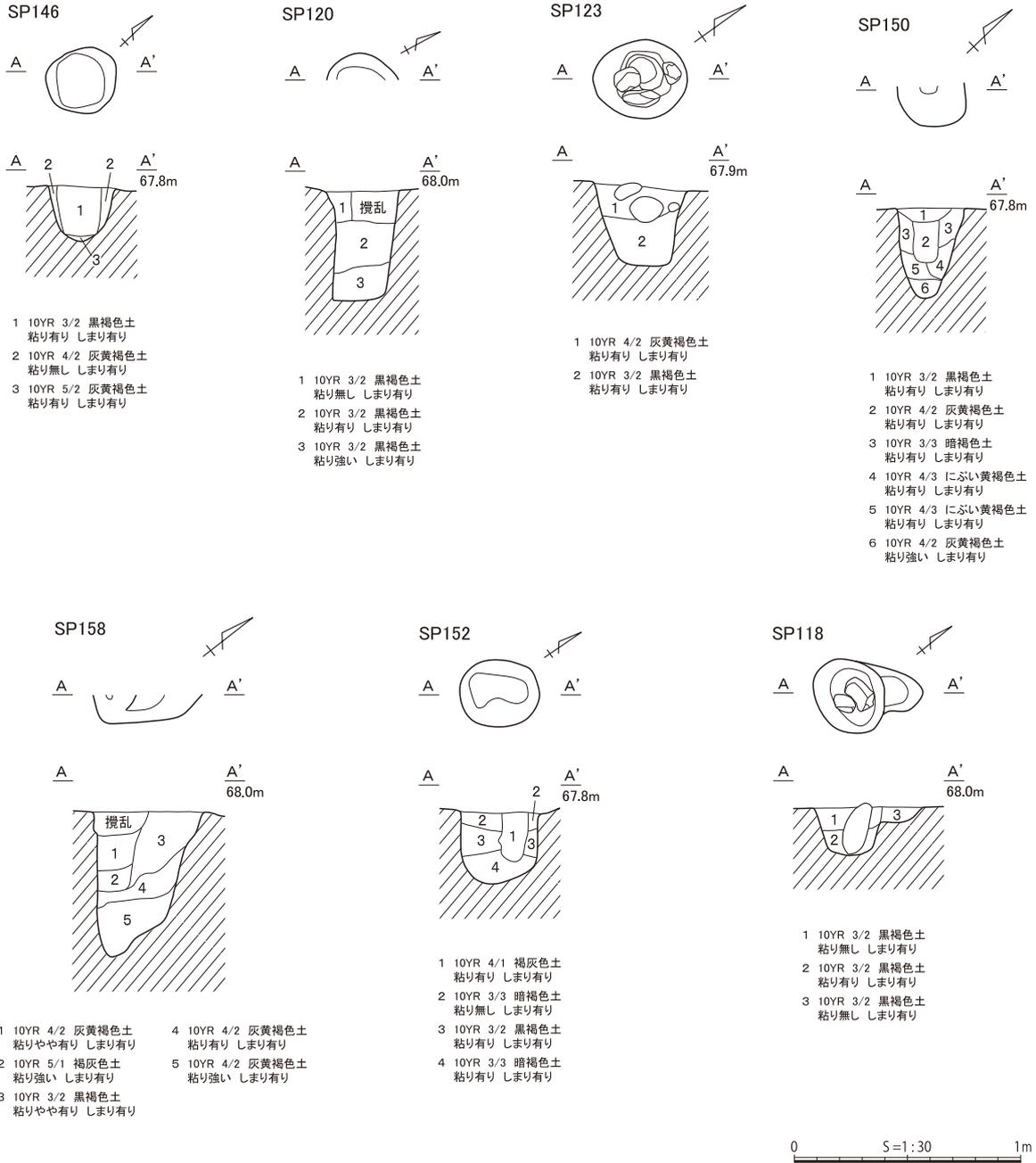
第21図 SP(小穴)平面・断面図(1)



第22図 SP(小穴)平面・断面図(2)



第23図 SP(小穴)平面・断面図(3)



第25図 SP(小穴)平面・断面図(5)

第3表 遺構計測表(2) 小穴

() は残存値

遺構名	グリッド	平面形態	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	切り合い関係
SP01	L-11	不明	(16)	(6)	24		
SP02	M-11	不明	(31)	(19)	28		
SP03	L-11	不整円形	31	30	9		
SP04	L-11	不整円形	29	27	12		
SP05	L-11、M-11	不整方形	31	30	22		
SP06	L-11	不整円形	28	28	11		
SP07	L-11	不整円形	31	29	23		
SP08	L-11	円形	26	25	14		
SP09	L-11	円形	17	16	14		
SP10	L-11	不整円形	42	35	36		
SP11	L-10	円形	31	27	53	碟1点	
SP12	L-10	円形	44	(41)	60		SP49に切られる
SP13	L-10	楕円形	34	32	56	碟1点	
SP14	L-10	不整円形	65	56	50		
SP15	L-10	不整円形	(53)	47	72	かわらけ3片	SP38と切り合う
SP16	M-10	円形	37	35	6	かわらけ2片	
SP17	M-10	楕円形	48	41	10	碟1点	
SP18	M-10	方形	36	36	32		
SP19	M-10	不整楕円形	109	88	42	碟2点	SP20と分離不可
SP21	M-10	方形	33	(30)	28		SK04と切り合う
SP22	M-11	不整円形	29	25	6		
SP23	M-10	円形	39	36	40		
SP24	M-11	円形	33	33	31		
SP25	M-11	円形	39	35	24		
SP26	M-11	円形	25	21	34		
SP27	L-10	円形	35	33	36	かわらけ1片	
SP29	M-11	楕円形	32	29	13		SK01と切り合う
SP30	M-10	円形	37	37	37		
SP31	M-11	長方形	39	31	42		
SP32	L-11	円形	60	(55)	50		SP33と切り合う
SP33	L-11	円形	(35)	28	55		SP32と切り合う
SP35	L-11	円形	25	22	11		SX02内で検出
SP36	M-10	不整円形	25	24	13		
SP37	M-10	楕円形	23	15	22	かわらけ1片	SK02の下
SP38	L-10、M-10	方計	(38)	38	(28)	かわらけ2片	
SP40	M-10	不整円形	53	48	(30)	碟1点	SK10と切り合う
SP41	L-11	楕円形	45	39	28	かわらけ1片	SP42を切る SX02内で検出
SP42	L-11	楕円形	34	(28)	14	碟4点	SP41に切られる SX02内で検出
SP43	M-10	楕円形	11	(16)	13		SK02と切り合う
SP44	L-11	楕円形	24	21	30		
SP45	L-10	不整楕円形	32	29	10		
SP46	L-11	不明	(7)	(32)	23		
SP47	L-10	不整楕円形	33	23	51	かわらけ1片	
SP48	L-10	楕円形	25	20	27		
SP49	L-10	長方形	32	19	19		SP12を切る
SP50	L-11、M-11	不整円形	32	30	9		
SP51	M-11	楕円形	30	20	17		
SP52	L-11	円形	46	43	19	かわらけ1片	SP55を切る
SP53	M-11	円形	28	28	17		SX02内で検出
SP54	M-11	不整楕円形	53	34	15		

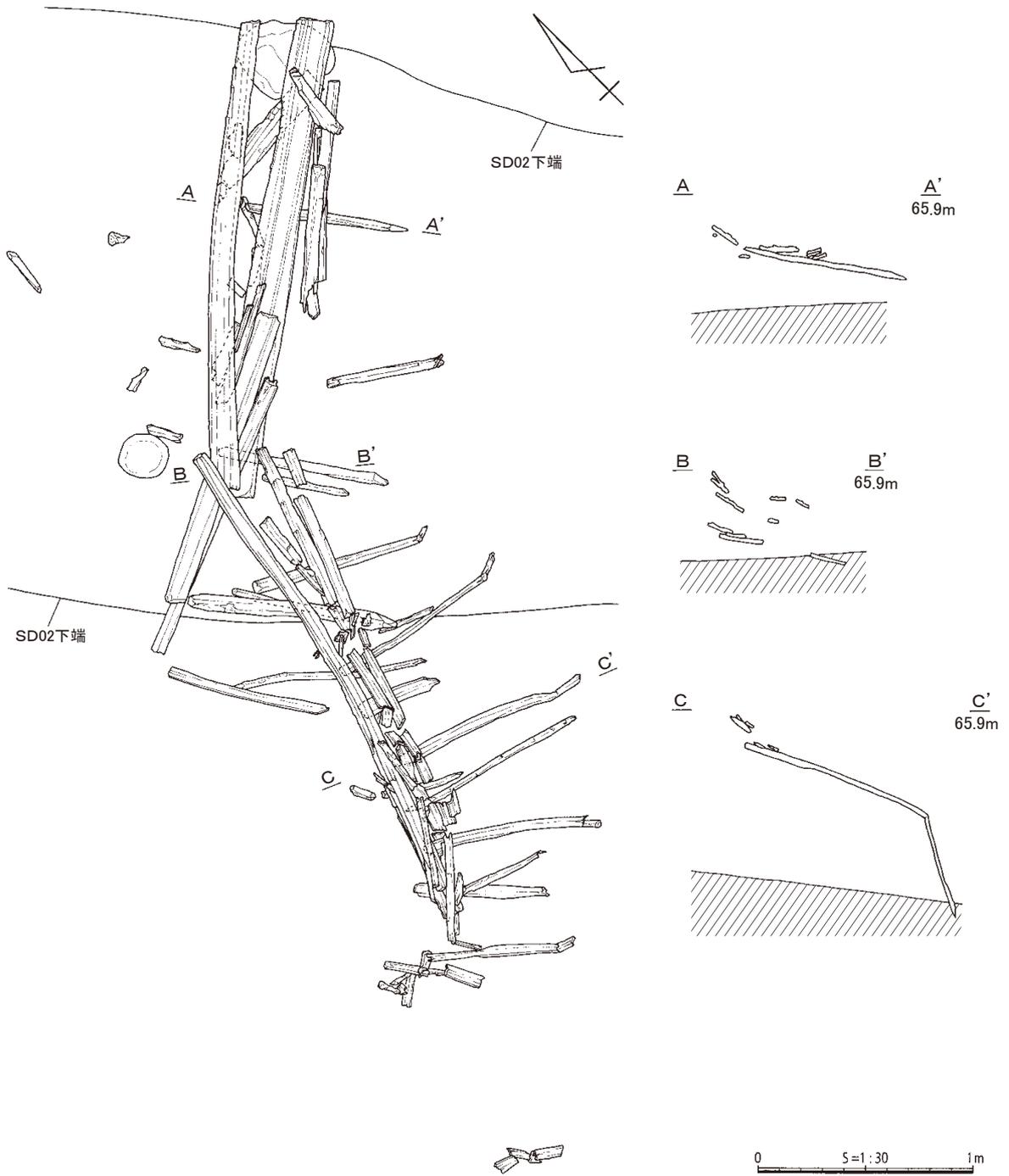
()は残存値

遺構名	グリッド	平面形態	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	切り合い関係
SP55	L-11	円形?	25	(12)	21		SP52に切られる
SP56	M-10	円形?	28	(23)	45	かわらけ3片	SK04に切られる
SP57	L-11	不整楕円形	39	38	27		
SP58	M-11	円形	38	36	23		SX02内で検出
SP59	L-10	楕円形	64	34	47		
SP60	M-10	円形	37	35	23		
SP61	L-10	不整形	47	43	34		
SP62	L-10	不整形	52	47	66	かわらけ1片	
SP63	M-10	円形	45	43	56	かわらけ1片	
SP64	M-11	不整円形	56	49	52		
SP65	L-10	楕円形	58	52	29	かわらけ1片	
SP66	L-10、M-10	楕円形	66	40	18	かわらけ3片	
SP67	M-10	楕円形	25	21	24		
SP68	L-10	円形	50	50	46	碟2点	
SP69	M-10	不明	(70)	(30)	43	碟1点	
SP70	M-10	不正円形	51	11	51		
SP71	L-10	隅丸方形	30	33	45	かわらけ1片	
SP72	L-10	円形	33	32	8		
SP73	L-10	不正円形	56	51	25		
SP74	L-11	不正円形	43	39	24		
SP75	L-11	円形	23	22	11		
SP76	L-10	円形	40	36	50	かわらけ5片	SP81と切り合う
SP77	M-10	不整楕円形	38	30	60	碟1点	
SP78	L-10、M-10	不定形	21	17	5		
SP79	L-10	楕円形	39	31	27	かわらけ3片	
SP80	L-10	不整楕円形	43	32	43		
SP81	M-10	不整円形?	35	32	36	かわらけ1片	SP76と切り合う
SP82	L-10	楕円形	23	18	6		
SP87	K-10	楕円形	24	17	10		
SP88	L-9	円形	20	20	6		
SP89	L-9	隅丸方形	32	30	20		
SP90	K-9	円形	44	40	17		
SP91	L-10	楕円形	63	45	64	碟1点	
SP92	L-10	隅丸方形	32	31	41		
SP93	K-10	楕円形	47	43	30	碟1点	SK17を切る
SP94	K-10	不整楕円形	25	20	32		
SP95	K-10	不整円形	20	18	21		
SP96	L-10	楕円形	32	24	58	碟2点	
SP97	L-10	楕円形	65	51	53		SP98を切る
SP98	L-10	不明	(37)	(26)	41		SP97に切られる
SP99	K-10	楕円形	28	25	42		
SP100	L-10	不整楕円形	40	35	46		
SP101	L-10	楕円形	42	35	(18)		
SP102	K-10	隅丸方形	51	47	(6)	かわらけ1片	
SP103	M-11	楕円形	40	33	43		
SP104	L-12	隅丸方形	23	20	18		
SP105	L-12	円形	35	30	21	かわらけ1片	
SP106	L-10	不整円形	22	20	15		
SP107	L-11	円形	47	46	43		
SP108	L-12	不明	(25)	(11)	26		

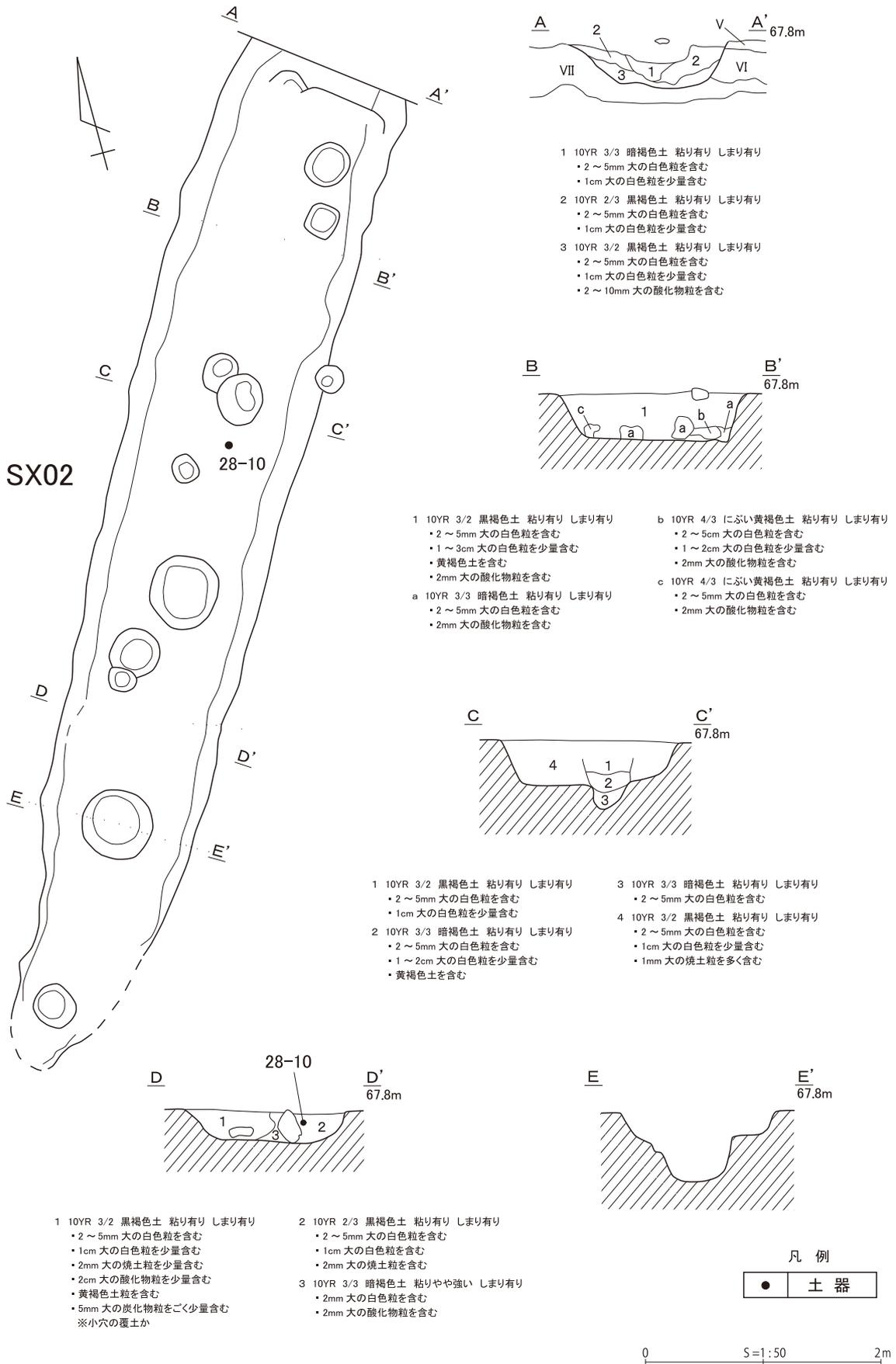
第4章 調査の成果

()は残存値

遺構名	グリッド	平面形態	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	切り合い関係
SP109	M-12	不明	(44)	(17)	24		
SP110	L-11、12	不明	(35)	(14)	(32)		SK25を切る
SP111	L-11	不明	(32)	(17)	24		
SP112	M-11	楕円形	(19)	(11)	50		
SP113	L-11	不整円形	22	20	10		SK25内で検出
SP114	L-11	不整円形	32	30	49		SK28内で検出
SP115	L-11	円形	25	22	54		SK27内で検出
SP116	M-11、M-12	不整楕円形	43	32	21		
SP117	L-11	円形	33	29	56		
SP118	L-11	不定形	48	32	21	碟2点	
SP119	L-11	楕円形	22	23	11		
SP120	K-11	不明	(31)	(12)	49		
SP121	K-11、L-11	不明	(33)	(19)	32		SK39に切られる
SP122	K-10	隅丸方形	28	27	29		
SP123	L-11	楕円形	42	36	36	碟4点	
SP124	M-11	不定形	48	34	38		
SP125	L-12	楕円形	31	26	17		
SP128	L-9	不整円形	35	32	35	瓦質土器1片	
SP129	K-10	楕円形	35	27	24	かわらけ3片	
SP130	K-10	楕円形	25	20	29	かわらけ4片	
SP131	L-10	不定形	(41)	55	33	かわらけ1片	SP157を切る
SP132	L-10	円形	34	32	26		
SP133	K-10、L-10	不整楕円形	48	35	46		
SP134	L-11	不明	(23)	(17)	41		
SP135	L-11	不整円形	(38)	(18)	21		
SP136	L-10	不整円形	22	22	28		
SP137	K-10	隅丸方形	46	42	53		
SP138	K-10	楕円形	49	42	29		
SP140	L-10	不整円形	35	32	16	かわらけ1片	
SP141	L-10	不整円形	45	41	35		
SP142	L-10	隅丸長方形	52	42	37		
SP143	L-10	不整円形	38	37	9		
SP144	K-10	不整隅丸方形	66	60	77	かわらけ1片	
SP145	K-10	不整円形	36	36	31		
SP146	K-11	不整円形	32	30	25		
SP147	K-10	円形	26	25	24		
SP148	L-11	円形?	29	(20)	36		
SP149	L-11	楕円形	38	30	26		
SP150	L-11	不明	(30)	(18)	41		
SP151	L-11	不整円形	22	19	18		
SP152	L-11	楕円形	35	30	32		
SP154	L-11	不明	(24)	(8)	61		
SP155	K-10	楕円形?	(32)	(18)	12		
SP156	L-10	隅丸方形	(39)	(35)	22	かわらけ1片	
SP157	L-10	不定形	65	49	44		SP131に切られる
SP158	L-11	不明	(48)	(13)	65		
SP159	K-10	不整円形	36	37	10		
SP160	K-9	不整楕円形	60	51	28	かわらけ1片	



第26図 SX01平面・断面図



第27図 SX02平面・断面図

なかった。全体の残存長（最大長）は4.65mであるが、南端部に散った部材と思われる板材片が出土しており、そこまで含めれば最大長は5.5mである。最大幅は1.7mである。部材は踏み板、橋脚とも大半がスギであった（付編参照）。

この遺構にかかわる遺物は出土していない（部材は除く）。そのため時期は不明であるが、SD02に関わるとすれば、ほぼ同時期が考えられる。なお、『伊勢新名所歌合絵巻』（13世紀末の成立と推定）には同様の構造の橋（橋脚の本数が少ないが）が描かれている（澁澤他編 1984）

ii) SX02（第27図）（図版6）

B区M-11及びL-11グリッドで検出された。幅は上端の最大幅で1.6m、底面幅は最大1.3m、確認面からの最大深度は45cmである。IV層中から掘り込まれ、V層上面で検出された。底面は平坦であり、断面形状は多少の乱れはあるが逆台形状を呈す。

底面にあるピットとの関係であるが、土層断面図で見ると限り、SP41はSX01の覆土を切って掘削されており溝ともなう小穴ではない。他の小穴は記録が残されていないために不明であるが、小穴が溝と同時期であるか不明である。ただし、他の溝状遺構（SD）で底部にピットを有するものがないためSXとして区別した。

遺物は図示した15世紀段階と思われるかわらけが出土している（第28図-10）。他に灰釉陶器の可能性のある小片が出土しているが、時期が明らかでないため、先のかわらけの年代を遺構の時期とするのが妥当であろう。

第2節 遺物

今回の報告では、2ヶ年度にわたる調査の出土遺物をまとめて報告する。平成20年度の調査区では全ての遺物を点上げし、その点数は木製品、木片以外は280点であった。木製品、木片は30点の遺物を採取し、不要なものは現地で廃棄した。23年度の調査における出土遺物は点上げしていない遺物も多く、数量の把握はしなかった。これらの遺物を分類すると、土器、陶磁器、石器、漆製品、木製品、礫等に分けることができる。出土量が少ないため、遺構出土のものと遺構外に分け、一括して記述する。

(1) 遺構出土の遺物（第28図）（図版8・10）

i) SD01

第28図1は古瀬戸の緑釉小皿である。口縁端部～内面の口縁直下に緑釉が掛けられている。内面にはススの付着が認められ、灯明皿に転用されて二次焼成を受けていると思われる。藤沢編年（藤沢2005）の古瀬戸後期様式の皿ないしIV期で15世紀のものである。2は古瀬戸の播鉢（もしくは卸目付大皿）の口縁部である。口縁端部は欠損している。全面に鉄釉が掛けられている。受け口状口縁の形状等より古瀬戸後期様式のIV期（古段階か）に比定できる。15世紀中頃であろう。割れ口の一部に漆継ぎの痕跡がある。

3は瓦質土器で、羽釜ないし茶釜の可能性はある。内外面ともススが付着しているが、特に外面は著しく、漆黒を呈す。時期は15～16世紀の可能性はある。4は土製鍋であり、恐らく鑊付のものと思われる。3と同様にススが付着しているが外面の方が著しい。器壁は著しく薄く重量も軽く、一見すると漆製品に見間違え破片である。

5～8はロクロ成形のかわらけである。5は口径12.1cm、底径5.9cmでほぼ2：1の比率となる。底径に対して口径が大きめである。器高は3.6cmある。6は口径6.8cm、底径3.2cmで、底径に対して口径が大きめである。器高は2.2cmある。7・8は底部であるが、器厚が厚めである。8は底径が8.1cmで、大型のかわらけである。これらのかわらけを一括遺物とするならば、相伴遺物から考えて15世紀代の遺

物と考えられる。池谷編年（池谷 2008）のVa期に相当しようか。15世紀の前半である。

9は本遺跡で出土した唯一の漆製品で、椀である。外面に朱で二重丸文が認められ、その中を何らかの文様で満たしていると思われるが、剥落が多く不明瞭である。材質はケヤキである（付編参照）。

写真図版でのみ掲載したものについて述べる。図版8-1-①は天目茶碗である。内外面とも鉄釉がかけられている。器形、口縁の形状より古瀬戸後期様式のIV期古段階のものと思われる。15世紀中頃である。②は常滑焼。外面は無釉であるが、内面は灰釉がかかっている。12世紀くらいのものか。

なお、ここから14～15世紀のものと考えられる瓦性火鉢？の破片が出土しているが、図・写真は割愛する。

ii) SD02（図版8）

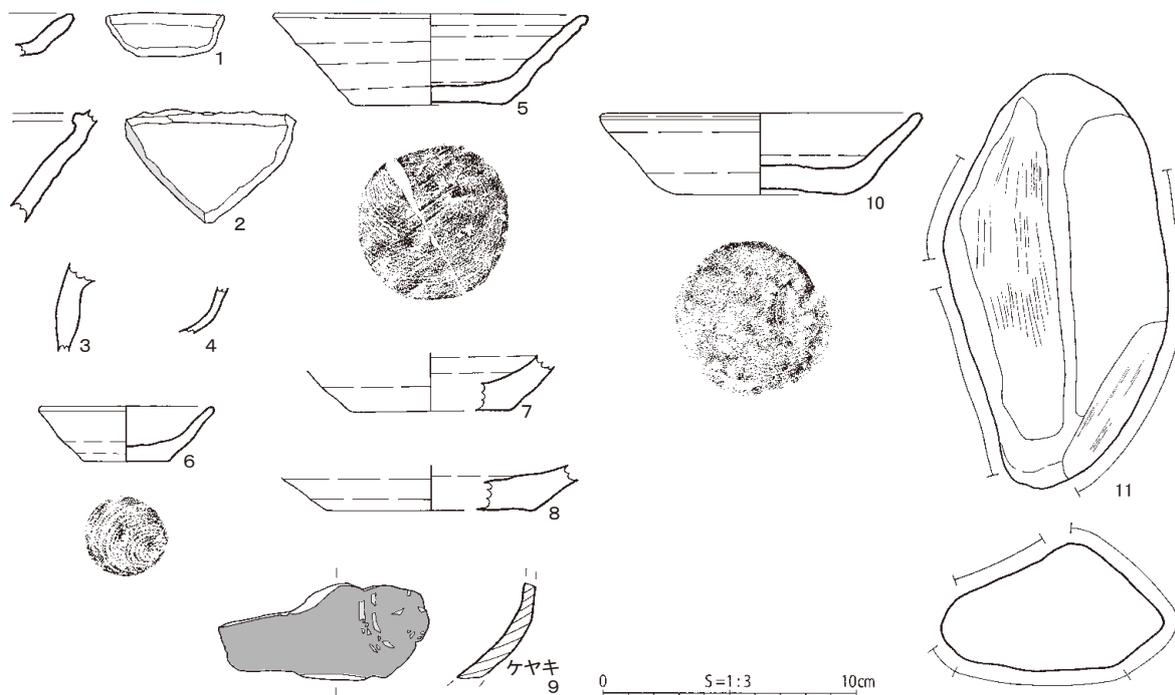
図版8-1-⑤は灰釉陶器ないしは山茶碗であろう。10～11世紀に比定されようか。外面に灰釉がかけられている。内面は無釉である。③と④は知多産の片口鉢A類である。同一個体の可能性があるが、③は遺構外の可能性がある。④は底部であり、内面はよく研磨されている。12～13世紀のものであろう。⑥は常滑の壺ないし甕であろう。中世のものとは分からない。なお、時期不明の土師器？が数点出土している（不掲載）。

iii) SX02（第28図）（図版10-2）

第28図10はロクロ成形のかわらけである。口径12.4cm、底径6.6cmで、器高は3.2cmある。やはり池谷編年のVa期に相当しようか。SD01のかわらけと同時期であろう。

iii) SK06（第28図）（図版10-10）

第28図11は安山岩製の砥石である。最大長16.5cm、最大幅8.9cm、最大厚5.4cm、重さ926.4gである。時代は不明である。



第28図 出土遺物(遺構)

(2) 遺構外の遺物 (第29図) (図版8～10)

第29図12は常滑焼の頸部破片。内外面ともに灰釉がかかっているが部分的である。13も常滑焼で底部の破片。灰釉がかかっているが、残存している部位では内面のみである。両者とも甕ないし壺と思われるが、これらから正確な時期を言うのは困難である。12は12～17世紀の幅が考えられ、13は15世紀のものと思われる。

14～17は別個体であるが、全て大窯製品第1段階の緑釉はさみ皿である(藤沢 2005)。見込み部分は良く研磨されているという特徴を共有する。15世紀後半～16世紀前半。

18・19は戦国期の播鉢の口縁部である。18は口縁端部が内側に折れ曲がる、古瀬戸後期Ⅳ期新段階に特徴的に見られる播鉢であり、15世紀後半に相当する。19は大窯製品第1段階の播鉢Ⅰ類。欠失部が多く、前半か後半かは判然としない。15世紀後半～16世紀前半に相当しよう。

20・21は瓦質土器である。2片とも小片のため詳細は述べられないが、20は羽釜ないし火鉢で戦国期のものと推定される。21は火鉢の可能性はあるが時期は不明である。外面にススが付着している。

22～30はかわらけである。共伴する陶磁器等が不明なため時期等不明な点があるが、古い特徴もったものは見当たらないので遺構出土のものと同時期であろうか。なお、29はいわゆるウズマキかわらけ(横浜市歴史博物館 2011)である。これは相模、武蔵に分布の中心があり(特に武蔵)、城館からの出土例が多く、関東管領の扇谷上杉氏との関連を考える説がある。伊豆国では韮山城跡からの出土がある(静文研 1997)(注1)。本遺跡の性格を考える上で重要であろう。

31は志野焼の皿である。長石釉が内外面ともにかかっている。内面は全面であるが、外面は高台近くまでかけて、高台は無釉とする。連房式登窯の第1ないし第2段階で17世紀のものであろう。

32は唐津焼の碗の底部。灰釉が内外面ともにかかっている。内面は全面であるが、外面は高台近くまでかけて、高台付近は無釉とする。見込みには砂目が残存部分において3か所見られる。17世紀中頃～後半のものであろう。

33・34は瀬戸・美濃の灯明皿。小片のため、口径等は確実ではない(特に34)。共に錆釉が全面掛けられている。33は外面の釉はむらが目立つ。34は受皿で外面の釉は口縁下は厚くかけられているが、底部近くなるに従って薄くなり、無釉に近くなる。両者ともに18世紀のものであろう。

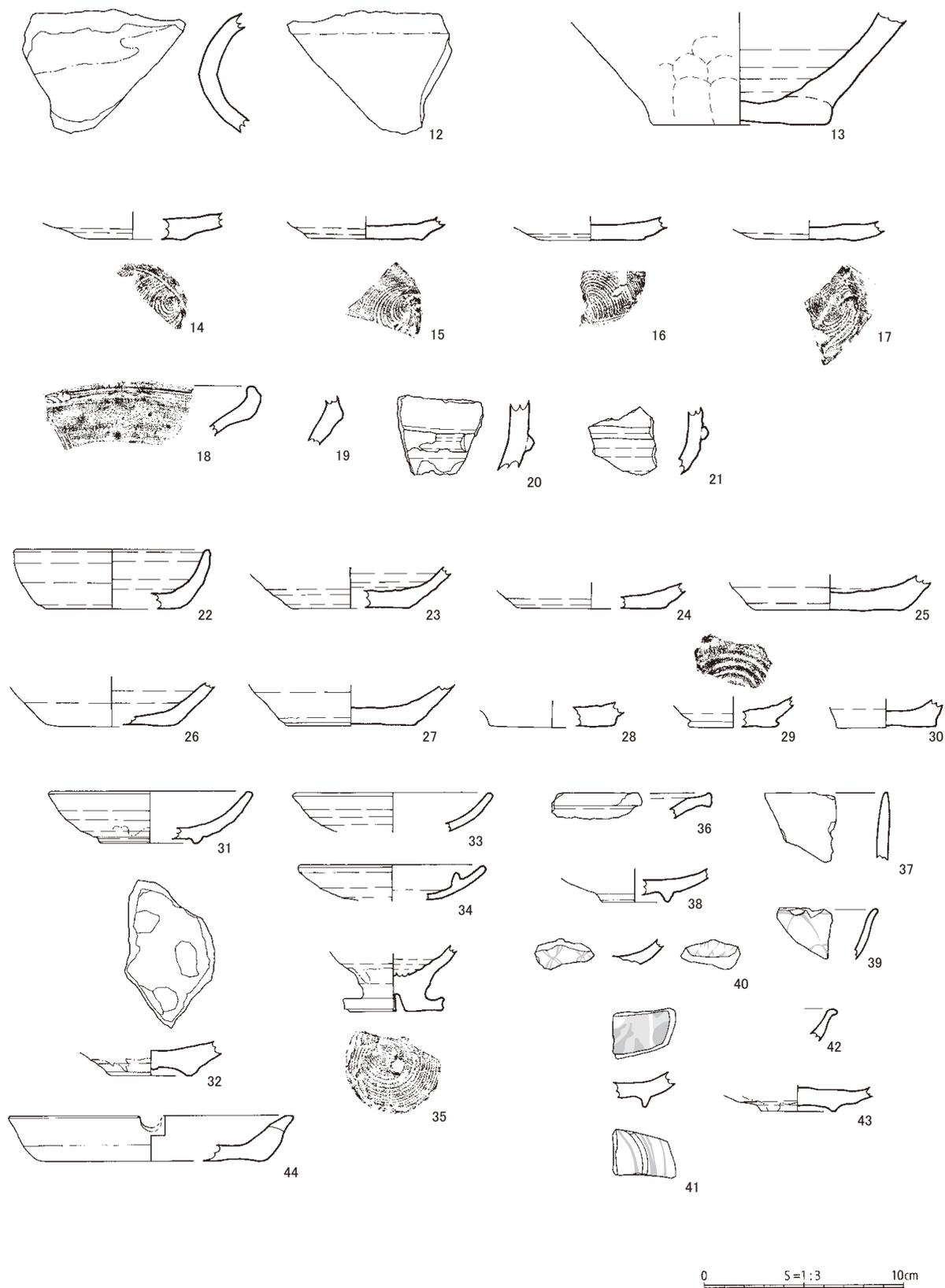
35は脚付の乗燭である。体部内面は飴釉をかけているがムラが目立つ。体部外面は鉄釉をかけた後、上部に飴釉をかけていると思われる、残存した部分において流れた飴釉が垂れている。底板は平板的である。18世紀後半以降のものであろう。

36は美濃焼の折縁型小皿の口縁部。弱く屈曲する。内外面等とも灰釉がかかっており、やや貫入が目立つ。18世紀のものであろう。

37～41は江戸時代の肥前産磁器である。37は香炉の口縁部。38は皿の底部である。39は網目文を描いた碗であり、18世紀前葉～中葉のものである。40は外面に二重網目文を描き、内面に連続する三角文?を描いた碗である。18世紀後半以降であろう。41は皿の底部。外面は高台内も含めて円圏文を描く。見込み内の文様は不明である。

42～44は時代不明の土器・陶磁器を一括した。42は貫入が見られるが、白磁碗の可能性もある。13世紀のものと考えたが、近世の可能性もある。43は碗ないし向付の可能性のある底部。内外面等とも灰釉がかかっているが、外面は高台とそのまわりは無釉である(流れ込みはある)。44は土器(かわらけ?)を転用した灯明皿で焼成後に口縁部に穿孔が行われている。底面を除き内外面とも黒ずんでおり、内面にはススの付着が認められる。

この他、写真図版のみで掲載した遺物について記す。図版10-11は攪乱土から出土した縄文時代の打製石斧である。短冊形で、最大長13.5cm、最大幅5.1cm、最大厚2.4cm、重さ163.1gである。伊豆産



第29図 出土遺物(遺構外)

の凝灰岩を用いて作成されており、かなり磨滅している。中期のものであろうか。攪乱土中から出土したことも踏まえれば、極めて新しい時期に他の遺跡から客土とともに持ち込まれた可能性もある。

図版8-5-①と③は緑釉小皿の口縁部である。①は内外面とも口縁端より4mm程度まで緑釉を掛け、その下は無釉とする。古瀬戸後期様式のⅣ期古段階のものと思われる。15世紀中頃である。B区Ⅳ層中出土。③は内外面共に口縁端より1.1～1.4cm程度まで緑釉を掛け、その下は無釉とする。古瀬戸後期様式のⅣ期新段階のものと思われる。15世紀後半である。両者ともに垂れた釉が見られる。A区表土出土。

②と④は貿易陶磁である。共にB区Ⅳ層中出土。②は白磁皿B群の口縁で、15世紀前半であろう。内外面とも細かい貫入が見られる。④は青磁碗E類の腰の部分の破片である。15世紀後半～16世紀前半のものと思われる。

このほか、図・写真を割愛した遺物として、表面採集で得られた神津島産黒曜石のチップ、石英の火打石、凹石ないし磨石の可能性のある安山岩製の円礫がある。黒曜石は縄文時代の遺物と思われるが、前述の打製石斧と同様に、本遺跡に本来あったものか不明である。また、時代不明の須恵器の甕（1片のみであり、時期については6世紀～平安まで考えられ、胎土から湖西産の可能性が強い）、土師器？が遺構内外より出土しているが、遺構出土のものは遺構に直接関連するか不明である。また、各遺構よりかわらけの小片がかなり多く出土しているが、図・写真とも割愛した。遺構観察表を参照されたい。

註

- (1) 伊豆の国市教育委員会の池谷初恵氏によれば、伊豆の国市の「守山中世史跡群」の諸遺跡から「ウズマキかわらけ」の出土が認められるということである。ただし、通常のかわらけの範疇でとらえているために、報告書では特別のものとして取上げてはいないとの御教示を賜った。

第4表 遺物観察表

図番号	挿図番号	出土位置取上番号	種別	器種	計測値 () は復原径			残存率	色調	胎土	特記事項
					口径(cm)	底径(cm) 高台径(cm)	器高(cm)				
第28図	1	SD 01 16	陶器 古瀬戸	緑釉小皿	—	—	—	—	—	3mm以下の白色粒子 1mm以下の黒色粒子(少)	灯明皿に転用される
第28図	2	SD 01 15	陶器 古瀬戸	描鉢もしくは 卸目付大皿	—	—	—	—	—	2mm以下の白色粒子(少)	15世紀中頃～後半
第28図	3	SD 01 31	瓦質 土器	羽釜または 茶釜	—	—	—	—	(外面) 5Y4/1 灰 (内面) N3/10 暗灰	1mm以下の白色粒子(多) 1mm以下の黒色粒子	内外面ともスス付着
第28図	4	SD 01 Tr 1	陶器?	土製鍋 (鋳付?)	—	—	—	—	—	1mm以下の白色粒子(微)	内外面ともスス付着 極めて薄い
第28図	5	SD 01 19	かわらけ	皿	12.3	6.0	3.6	口縁部 88% 胴部～底部 100%	7.5YR6/6 橙	1mm以下の白色粒子 1mm以下の黒色 粒子(少) 1mm以下の赤色粒子(微)	ロクロ成形
第28図	6	SD 01 21	かわらけ	皿	(6.9)	3.3	2.2	口縁部～胴部 80% 底部 100%	10YR7/4 にぶい黄橙	1mm以下の白色粒子(少) 1mm以下 の黒色粒子(少) 1mm以下の赤色 粒子	ロクロ成形
第28図	7	SD 01 26	かわらけ	皿	—	(6.2)	残存高 2.1	胴部 5% 底部 10%	5YR7/6 橙	1mm以下の白色粒子(少) 1mm以下 の黒色粒子(少) 1mm以下の赤色 粒子	ロクロ成形
第28図	8	SD 01 28	かわらけ	皿	—	(8.2)	残存高 1.8	胴部 5% 底部 15%	(外面) 7.5YR7/4 にぶい橙(内面) 10YR7/4 にぶい黄橙	1mm以下の白色粒子(少) 2～5mm の白色粒子(微) 1mm以下の赤色 粒子(少) 1mm以下の黒色粒子(少)	ロクロ成形
第28図	9	SD 01 w-008	漆製品	椀	—	—	—	—	—	—	外面に朱で二重丸文を 描き、その中を文様で 充填
第28図	10	SX 0 2 P-220	かわらけ	皿	(12.5)	6.0	3.3	口縁部 20% 底部 100%	7.5YR7/6 橙	1mm以下の白色粒子(少) 2mm程度 の黒色粒子 赤色粒子	ロクロ成形
第28図	11	SK 0 6 S-245	砥石		最大長 16.5 最大厚 5.4	最大幅 8.9 重量 926.4		—	—	—	安山岩製
第29図	12	A区 6	陶器 常滑	甕または 壺?	—	—	—	—	—	1mm以下の白色粒子(多) 黒色粒子 透明粒子	灰釉
第29図	13	A区 攪乱	陶器 常滑	甕または 壺?	—	(9.2)	残存高 5.7	胴部 10% 底部 20%	—	1～2mmの白色粒子 1mm程度の黒 色粒子 1～2mmの赤色粒子 2～ 1mmの赤褐色粒子	灰釉 戦国期か
第29図	14	D区 k-10 グリッド Ⅳ層	陶器 大窯製品	緑釉 はさみ皿	—	5.4	残存高 1.4	底部 25%	2.5Y8/2 灰	白色粒子 黒色粒子 透明粒子	14～17は別個体
第29図	15	C区 M-11 グリッド 攪乱	陶器 大窯製品	緑釉はさみ 皿	—	5.8	残存高 1.2	底部 25%	2.5Y8/1 灰白	白色粒子 黒色粒子 褐色粒子	

第4章 調査の結果

図番号	挿図番号	出土位置 取上番号	種別	器種	計測値 () は復原径			残存率	色調	胎土	特記事項
					口径 (cm)	底径(cm) 高台径(cm)	器高 (cm)				
第29図	16	C区 M-12 グリッド IV層	陶器 大窯製品	緑釉はさみ 皿	—	5.5	残存高 1.2	底部 50%	25Y8/1 灰白	白色粒子 黒色粒子 褐色粒子 透明粒子	
第29図	17	D区 L-10 グリッド IV層	陶器 大窯製品	緑釉はさみ 皿	—	5.4	残存高 1.0	底部 30%	25Y7/2 灰	白色粒子 黒色粒子 透明粒子	
第29図	18	B区 164 IV層	陶器 古瀬戸	播鉢	—	—	—	—	(外面) 5YR3/1 黒褐 (内面) 5YR3/3 暗赤褐	白色粒子 黒色粒子 茶色の粒子	15世紀後半
第29図	19	B区 152 IV層	陶器 大窯製品	播鉢	—	—	—	—	10R2/1 赤黒	2mm以下の白色粒子 1mm以下の茶色 の粒子	15世紀後半～16世紀前半
第29図	20	B区 165 IV層	瓦質 土器	羽釜 ないし火鉢	—	—	—	—	25Y8/1 灰白	2mm以下の灰色粒子 白色粒子 黒色 粒子 褐色粒子をそれぞれ多く含む	戦国期
第29図	21	D区 L-10 グリッド IV層	瓦質 土器	火鉢?	—	—	—	—	10YR7/1 灰白	2mm以下の灰色粒子 白色粒子 黒色 粒子 褐色粒子をそれぞれ多く含む	スス付着
第29図	22	A区 5	かわらけ	皿	(9.7)	(6.6)	3.0	口縁部～胴部 20% 底部 10%	7.5YR6/6 橙	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下の 黒色粒子 1mm以下の赤色粒子 (多)	22～30は遺構出土かわ らけと同時期か
第29図	23	A区 トレンチ 4 2	かわらけ	皿	—	(5.8)	残存高 1.8	胴部～底部 25%	7.5YR6/4 にぶい橙	1mm以下の白色粒子 1mm以下の赤 色粒子	
第29図	24	B区 191 IV層	かわらけ	皿	—	(7.5)	残存高 1.3	胴部 5% 底部 60%	7.5YR7/6 橙	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少)	
第29図	25	B区 7 IV層	かわらけ	皿	—	(7.4)	残存高 1.8	底部 40%	7.5YR7/6 橙	2mm以下の白色粒子 2mm以下の黒色 粒子 1mm以下の赤色粒子	
第29図	26	B区 176 IV層	かわらけ	皿	—	(6.0)	残存高 2.2	胴部 5% 底部 35%	7.5YR8/6 浅黄橙	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少) 1mm以下の赤色粒 子 (少)	
第29図	27	C区 L-10 グリッド IV層	かわらけ	皿	—	(6.7)	残存高 2.1	胴部 10% 底部 55%	7.5YR8/6 浅黄橙	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少) 1mm以下の赤色粒 子 (微)	
第29図	28	B区 188 IV層	かわらけ	皿	—	(6.2)	残存高 1.3	底部 20%	(外面) 7.5YR7/4 橙 (内面) 10YR4/2 灰黄褐	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少) 1mm以下の赤色粒 子 (少)	
第29図	29	B区 196 IV層	かわらけ	皿	—	(4.5)	残存高 1.6	底部 45%	7.5YR7/8 黄橙	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少) 1mm以下の赤色粒 子 (微)	ウズマキかわらけ
第29図	30	C区 L-10 グリッド IV層	かわらけ	皿	—	(5.0)	残存高 1.4	底部 30%	7.5YR8/6 浅黄橙	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少) 1mm以下の赤色 粒子 (少) 1～2mmの白色粒子 (微)	
第29図	31	B区 196 IV層	陶器 志野	皿	—	(5.0)	2.6	口縁部～胴部 17% 底部 14%	2.5YR8/2 灰白	3mm以下の白色粒子 (少) 黒色粒子 (少) 褐色粒子 (少) 透明粒子 (多)	長石釉 連房式登窯による製品
第29図	32	B区 230 IV層	陶器 唐津	碗	—	4.2	残存高 1.7	胴部 10% 底部 45%	(外面) 7.5YR7/4 にぶい橙	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少)	灰釉 砂目あり
第29図	33	D区 L-10 グリッド IV層	陶器 瀬戸・美濃	灯明皿	(10.0)	—	残存高 2.0	口縁部 17%	—	白色粒子 (少) 黒色粒子 (少) 透明粒子 (少)	
第29図	34	B区 表採	陶器 瀬戸・美濃	灯明皿	(9.4)	—	残存高 1.8	口縁部 10%	—	白色粒子 (少) 黒色粒子 (少) 透明粒子 (少)	受皿
第29図	35	D区 攪乱	陶器	乗燭	—	4.9	残存高 3.5	底部 85%	2.5Y7/1 灰白	白色粒子 黒色粒子 透明粒子	
第29図	36	C区 排土	陶器 美濃	折縁型小皿	—	—	—	—	—	白色粒子 黒色粒子 透明粒子	
第29図	37	B区 一括	磁器 肥前	香炉	—	—	残存高 3.5	—	—	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少)	
第29図	38	B区 一括	磁器 肥前	皿	—	(3.3)	残存高 1.7	底部 18%	—	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少)	
第29図	39	D区 表土	磁器 肥前	碗	—	—	残存高 2.6	—	—	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (やや多)	網目文
第29図	40	B区 表採	磁器 肥前	碗	—	—	—	—	—	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少)	外面に二重網目文
第29図	41	D区 K-10 グリッド IV層	磁器 肥前	皿	—	—	残存高 1.9	—	—	1mm以下の白色粒子 (少) 1mm以下 の黒色粒子 (少)	
第29図	42	B区 229 IV層	磁器?	白磁碗?	—	—	—	—	—	白色粒子 黒色粒子 (微)	
第29図	43	B区 199 IV層	陶器	碗? 向付?	—	3.7	残存高 1.2	底部 100%	—	白色粒子 黒色粒子 褐色粒子	灰釉
第29図	44	D区 K-10 グリッド IV層	土器 または かわらけ	灯明皿	(14.2)	(11.5)	2.3	口縁部～胴部 12% 底部 10%	7.5YR6/3 にぶい褐色か	白色粒子 黒色粒子 褐色粒子	土器またはかわらけを 転用

第5章 まとめ

(1) 遺跡・遺構について

今回報告する、平成20・23年度の日向館の調査成果は、過去の調査の正式な成果が全く公にされていない現状において、実質的に初めての発掘調査成果の公開となるものである。道路の建設に伴う緊急調査であり、調査範囲も道路幅に沿った限定された範囲であったが、調査区の長さが87mあり、かなり広範に調査することが出来て、多くの情報を我々にもたらしてくれた。

調査区は年度等の関係で、北からA区、C区、B区、D区と呼称した。以下各区ごとに成果をまとめて記す。

A区では2基の溝状遺構が検出されている。S D01はその出土遺物に15世紀後半の遺物が見られる点より、その時期まで使用され埋没したと考えられる。S D02は自然流路であるが、S X01の橋状遺構が検出されたとおりに、人々の活動と無関係に存在したわけではない。また時期の判明する遺物のうち最も新しいものは12～13世紀のものなので、その時期までに埋没した可能性がある。A区は建物が存在した痕跡が窺えず、両者の溝はそれより南の地区の遺構群を画する溝ないし流路であった可能性が高い（特にS D01）。

C区、B区、D-1区は一体的な地区なのでまとめて記述する。掘立柱建物、小穴群、土坑群、溝状遺構が検出されている。明確な建物と認定できたものは一棟のみであるが、多数の小穴の大半は建物の柱等の痕跡だと考えられる。従って、ここに建物群が存在していたことは確実である。また、土坑の多くは墓と考えられ、数か所の墓域の存在を第4章では推定した。また、遺構の年代は明確には決め難いが、多くの遺構でかわらけが出土している点や、平安～鎌倉時代や江戸時代の遺物が出土していない点等からS D01と同時に存在していた可能性が高い。

D-2区は遺構、遺物等検出されておらず、遺跡の範囲外と思われる。ただし、等高線で示された地形は流路（またはその痕跡）かもしれない、その北の遺構群を区画する役割をもっていた可能性がある。

以上、各地区について述べてきたが、最後に今回の調査の成果を総合的に述べる。C区、B区、D-1区が本遺跡の中心的な部分の一角であることは間違いが無いであろう。今まで述べた遺構のあり方から、当初予想された館跡の存在については、今回の成果で明確な証拠が得られたとは言えない。一般の集落としても何ら差し支えないのである。区画溝も館跡の堀であると確実に言えるわけではない。従って、遺跡の性格としては、区画溝を持つ集落遺跡との評価のみができると思う。

(2) 遺物について

今回の調査に伴う遺物は全体としては少ない。実測図が作成可能なものについては、全て図示している。また、作成不可能であっても、写真図版で掲載する必要があるものについては掲載し、説明を加えた。以下時代別に古い時代のものから述べていきたい。

縄文時代の遺物は打製石斧と黒曜石のチップが出土しているが、表面採集品や攪乱土からの出土であって、本遺跡に本来的に存在していたのか不明である。また、須恵器の甕の破片や土師器の可能性のある小片の出土もあったが、時期不明であり、それらから何かを言うのは難しい。

本遺跡本来の遺物で、明確に時期比定が可能な遺物の最も古い遺物は、10～11世紀の灰釉陶器ないし山茶碗であり、それに続いて12～13世紀の知多産の片口鉢がある。何れも溝状遺構S D02より出土し、限定的な出土状況である。

14世紀のものと明瞭に言える資料はない（可能性のあるものは存在する）。江戸時代以前の遺物で最も量が多いのは室町後期～戦国期の遺物である。古瀬戸後期Ⅲ・Ⅳ期、大窯製品第1段階のものが主

で、15世紀前半～16世紀前半である。S D02を除き、遺構の時期が推定できるものはすべてこの中にあてはまる。遺物が出土しない遺構も大半がこの時期であろう。かわらけもそれのみでは時期比定は困難であるが、S D01出土のものは池谷編年のVa期（15世紀前半）に相当すると考えて矛盾はない。他の遺構からもかわらけの小片がかなり多く出土しているがやはりこの時期を中心とすると思われる。なお遺構外ながら、ウズマキかわらけが出土していることも重要である。本文中でも述べたが、15世紀～16世紀に比定され、武蔵国の城館遺跡を中心として出土例が見られる。関東管領扇谷上杉氏との関連を説く見解も存在する。貿易陶磁として青磁碗E類の破片が出土しているが、これも15世紀後半～16世紀前半のものである。

近世の遺物は17世紀から出土している。明確な近世の遺構は存在せず、遺跡としての性格は分らない。単なる遺物散布地の可能性もある。

引用・参考文献

- ・秋山富南（原著）高橋廣明（監修） 2003 『豆州志稿 復刻版』 羽衣出版
- ・天城湯ヶ島町教育委員会 2004 『狩野氏の歴史』 天城湯ヶ島町史編纂資料第11集
- ・池谷初恵 2008 「伊豆地域におけるかわらけの変遷とその背景」『地域と文化の考古学Ⅱ』（明治大学考古学研究室編） 六一書房
- ・伊豆学研究会編 2010 『伊豆大事典』 羽衣出版
- ・伊禮正雄 1976 「『小田原衆所領役帳』 研究への提言－城郭との関りを中心に－」『関東戦国史の研究』（後北条氏研究会編） 名著出版
- ・江戸遺跡研究会編 2001 『図説江戸考古学研究事典』 柏書房
- ・小和田哲男 1991 「北条早雲と大見三人衆」『地方史静岡』 第19号
- ・尾形禮正・小川近 1978 「修善寺町加殿 中原遺跡の出土遺物について」『田文協』 研究論集第三集
- ・小野真一・辰巳和弘他 1982 『修善寺大塚』 修善寺町教育委員会
- ・加藤理文・中井均編 2009 『静岡の山城ベスト50を歩く』 サンライズ出版
- ・（財） 静文研 1997 『大見城跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第91集
- ・（財） 静文研 1997 『韮山城跡・韮山城内遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第90集
- ・財団法人瀬戸市文化振興財団 2006 『江戸時代の瀬戸・美濃 －三都と名古屋－』（記念講演会・シンポジウム資料集と企画展図録）
- ・静岡県教育委員会 1981 『静岡県の中世城館跡』 静岡県文化財調査報告第23集
- ・静岡県教育委員会 1988 『静岡県文化財地図Ⅰ』
- ・静岡県教育委員会 1988 『静岡県文化財地名表Ⅰ』
- ・静岡県教育委員会 2008 『静岡県文化財年報（平成19年度）』
- ・静岡県考古学会 1997 『静岡県における中世墓』
- ・静岡県考古学会 2004 『中世の信仰と祭祀』
- ・静岡県考古学会 2010 『静岡県における戦国山城』
- ・澁澤敬三・神奈川大学常民文化研究所編 1984 『新版絵巻物による日本常民生活絵引』 第三巻 平凡社
- ・杉山博（校訂） 1969 『小田原衆所領役帳』 近藤出版社
- ・戸羽山瀚 1967 『増訂豆州志稿伊豆七島志 全』 長倉書店
- ・沼館愛三 1937 「伊豆狩野地方に於ける古城址研究」『静岡県郷土研究』 第八輯（1982年復刻版）
- ・藤沢良祐 2005 「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡の中世社会 発表要旨・論考編』 菊川シンポジウム実行委員会
- ・横浜市歴史博物館 2011 『都筑区茅ヶ崎城跡と謎のウズマキかわらけ』
- ・渡井英誉 2009 「浅間大社遺跡における土師器皿の変遷（予察）」『浅間大社遺跡・山宮浅間神社遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第201集

付編 静岡県日向館出土木材の樹種

鈴木三男・小川とみ（東北大学植物園）

静岡県伊豆市日向の中世遺跡である日向館から出土した木材の樹種を調べた。調べた出土木材は橋状遺構他の構成材30点と漆椀1点である。樹種同定のためのプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターが作成し、そこに保管されている。

同定された樹種

1. スギ *Cryptomeria japonica* (Linn.f.) D.Don スギ科 写真図版I-1a-c (13456)

年輪の明瞭な針葉樹材で、一般に年輪幅は広く、晩材部が多い。早材から晩材への移行はゆるやかである。樹脂細胞が緩く接線方向にまとまって配列する。樹脂細胞の水平壁は比較的薄く平滑、細胞内には茶褐色の物質がある。放射組織は単列で樹細胞からなり、分野壁孔は大振りのスギ型で1分野に2個ある。これらの形質からスギの材と同定した。

検出された橋状遺構はほとんどスギ材で構成され、橋脚、渡し板、杭など24点であった。

2. ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科 写真図版I-2a-c (13485)

年輪の始めに丸い大道管があり孔圏外では薄壁多角形の小道管が集まって紋をなす環孔材。道管の穿孔は単一、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は1-8細胞幅になり大きく、上下辺の単列部には大きな結晶細胞を持つ。これらのことからニレ科のケヤキの材と同定した。

出土材は漆椀1点で、ケヤキ材は縄文時代から一貫して漆器に使われてきている。

3. シキミ *Illicium religiosum* Sieb. et Zucc. シキミ科 写真図版I-3a-c (13577)

薄壁多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は横棒の多い階段状である。放射組織は典型的な異性で1-2細胞幅、多列部は平伏細胞、単列部は直立細胞からなる。これらの形質からシキミ科のシキミの材と同定した。

出土材は杭1点であった。

4. ナシ亜科 Pomoideae バラ科 写真図版II-4a-c (13465)

丸く壁の薄い小道管がほぼ単独で均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一、放射組織は2列で同性に近い異性で、上下辺の細胞が方形細胞となる。これらの形質からバラ科の梨属、リンゴ属などのナシ亜科の材と同定した。

出土材は杭1点であった。

5. ヌルデ *Rhus javanica* L. var. *roxburghii* (DC.) Rheder 写真図版II-1a-c (13463)

年輪始めに丸い中型の道管が並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が複合した塊が散在する環孔材。木部柔組織は周囲状で晩材部では連合翼状となる。道管の穿孔は単一、放射組織は1-2細胞幅の異性で、接線面では細長く見える。これらの液質からウルシ科のヌルデの材と同定した。

出土材は橋脚の杭1点で、これは補助材としてのものと見なすことが出来る。

6. アカメガシワ *Malotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg. トウダイグサ科 写真図版I-1a-c (13462)

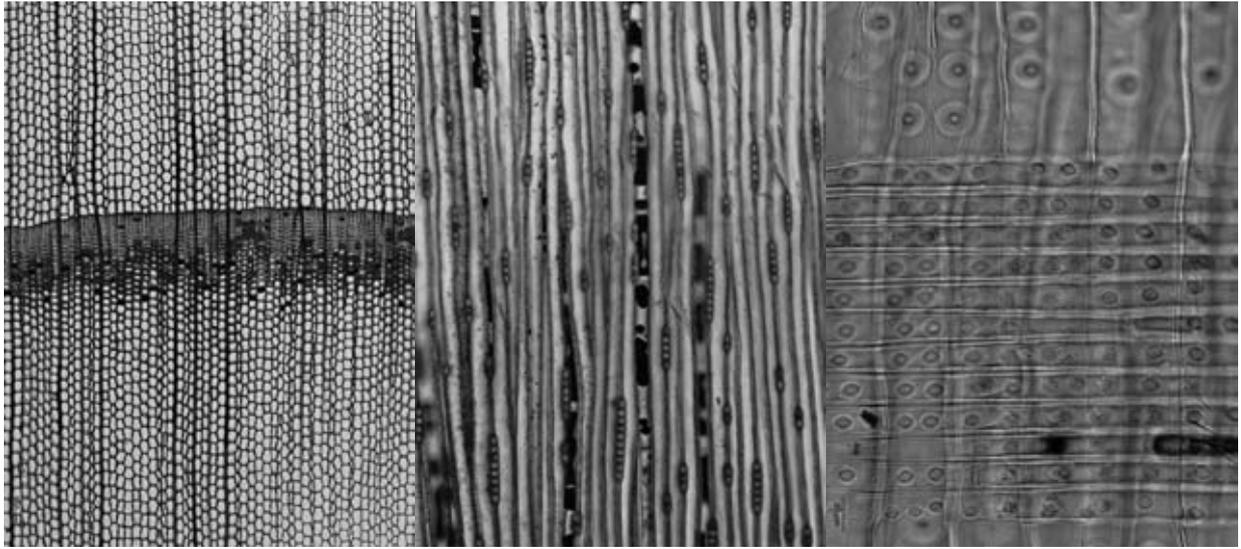
年輪始めに丸い中型の道管が単独あるいは2個複合して分布し、そこから順次径を減じて晩材部では丸くやや壁の厚い小道管が均一に散在する。道管の穿孔は単一、放射組織は単列異性である。これらの形質からトウダイグサ科のアカメガシワの材と同定した。

出土材は橋脚の杭1点でこれも同様に補助材として使われたものであろう。

表 1. 日向館遺跡出土木材の樹種同定結果

番号	プレバート No	同定結果	遺構	遺物番号	種別	備考
1	13456	スギ	SX01	No. 63 ②	板材 (橋渡し板)	
2	13457	スギ	SX01	No. 84	杭 (橋脚)	
3	13458	スギ	SX01	No. 88	板材 (橋渡し板)	
4	13459	スギ	SX01	No. 89	板材 (橋渡し板)	
5	13460	スギ	SX01	No. 90	板材 (橋渡し板)	
6	13461	スギ	SX01	No. 105	杭 (橋脚)	
7	13462	アカメガシワ	SX01	No. 107	杭 (橋脚)	
8	13463	ヌルデ	SX01	No. 110	杭 (橋脚)	
9	13464	スギ	SX01	No. 126 + 72	杭 (橋脚)	
10	13465	ナシ亜科	杭列 01	No. 131	杭	
11	13485	ケヤキ	SD01 ?	No. 008 ①②	漆碗	
12	13569	スギ	SX01	No. 63 ①	板材 (橋渡し板)	
13	13570	スギ	SX01	No. 67	板材 (橋渡し板)	
14	13571	スギ	SX01	No. 76	板材 (橋渡し板)	
15	13572	スギ	SX01	No. 79	板材 (橋渡し板)	
16	13573	スギ	SX01	No. 86	杭 (橋脚)	
17	13574	スギ	SX01	No. 87	杭 (橋脚)	
18	13575	スギ	SX01	No. 91	杭 (橋脚)	
19	13576	スギ	SX01	No. 108	杭 (橋脚)	
20	13577	シキミ	杭列 01	No. 132	杭	
21	13578	スギ	SX01	No. 92	杭 (橋脚)	
22	13579	スギ	SX01	No. 106	杭 (橋脚)	
23	13580	スギ	SX01	No. 111	杭 (橋脚)	
24	13581	スギ	SX01	No. 112	杭 (橋脚)	
25	13582	スギ	SD02	No. 116	杭	
26	13626	スギ		No.なし		
27	13627	スギ	SD02	No. 23	杭	
28	13628	スギ	SX01	No. 120	杭	
29	13629	スギ	SX01	No. 125	杭	
30	13630	スギ	SX01	No. 127	杭	
31	13632	スギ	SD02	No. 130	杭	

図版 I



1a. スギ 13456 木口×30

1b. 同 板目×60

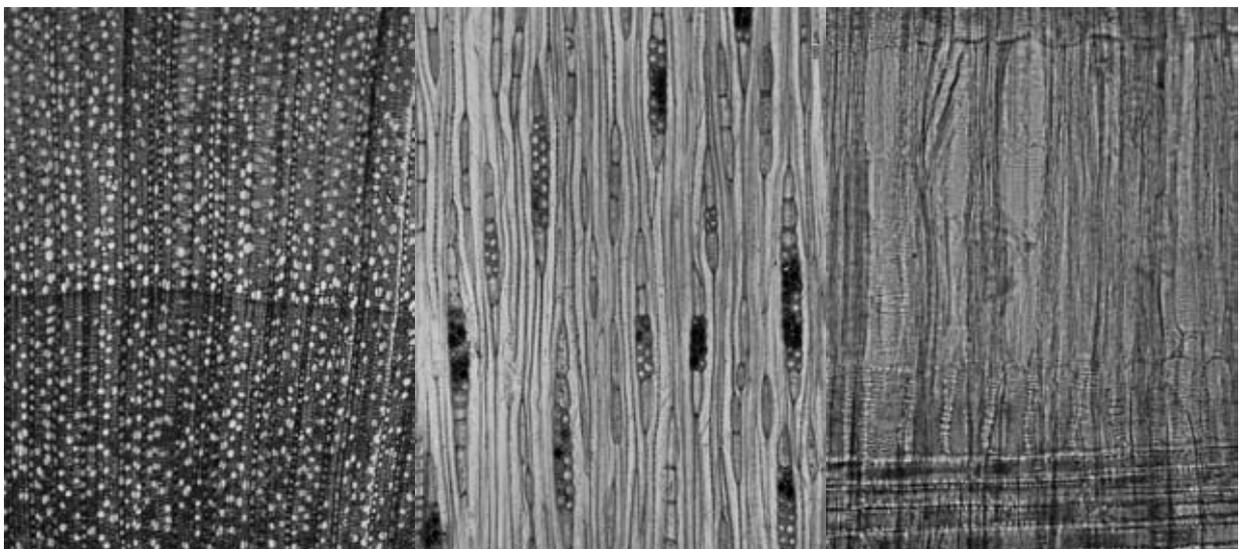
1c. 同 柁目×240



2a. ケヤキ 13485 木口×30

2b. 同 板目×60

2c. 同 柁目×120

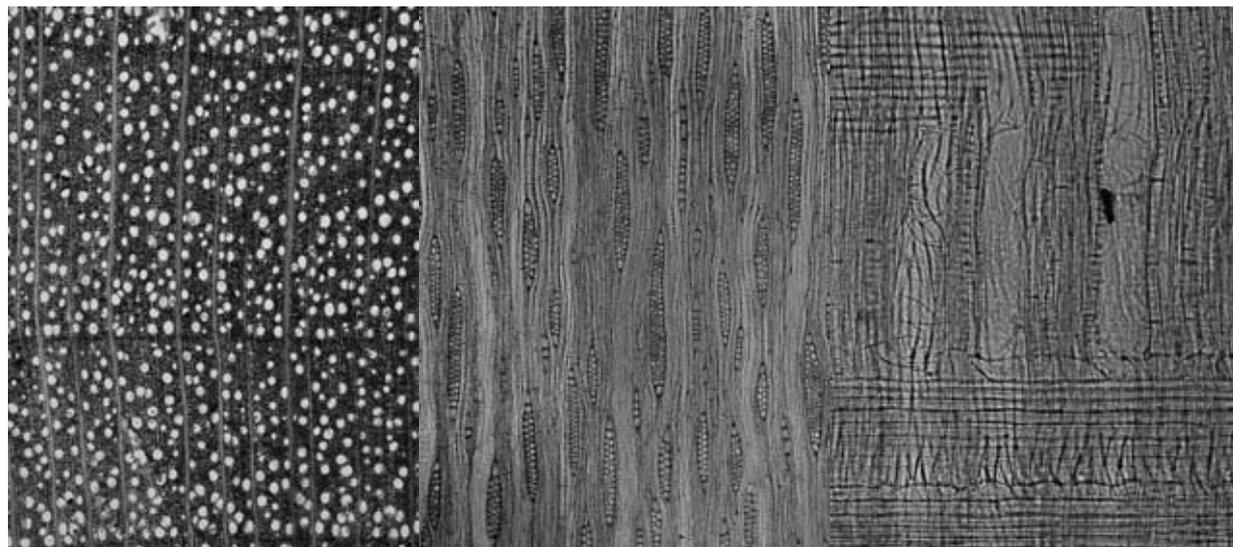


3a. シキミ 13577 木口×30

3b. 同 板目×60

3c. 同 柁目×120

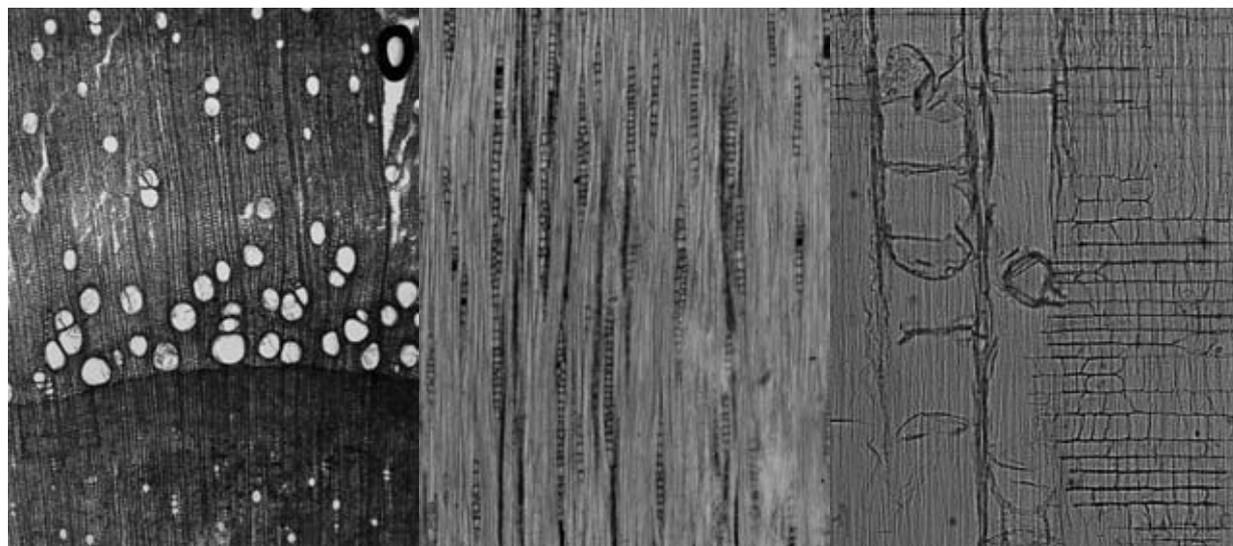
図版II



4a. ナシ亜科 13456 木口×30

4b. 同 板目×60

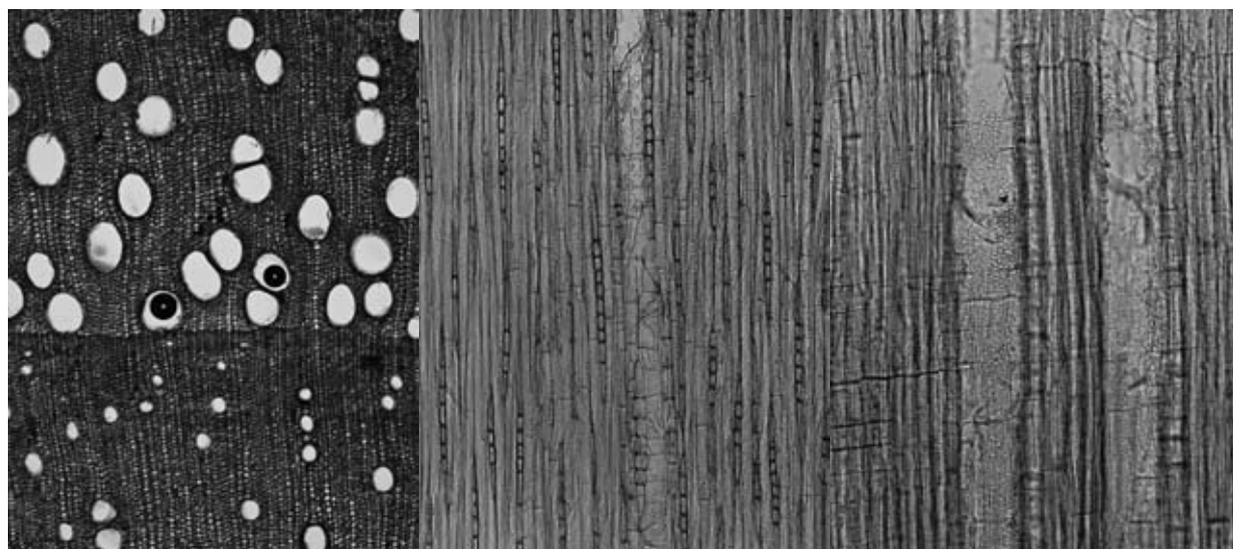
4c. 同 柁目×120



5a. ヌルデ 13463 木口×30

5b. 同 板目×60

5c. 同 柁目×120

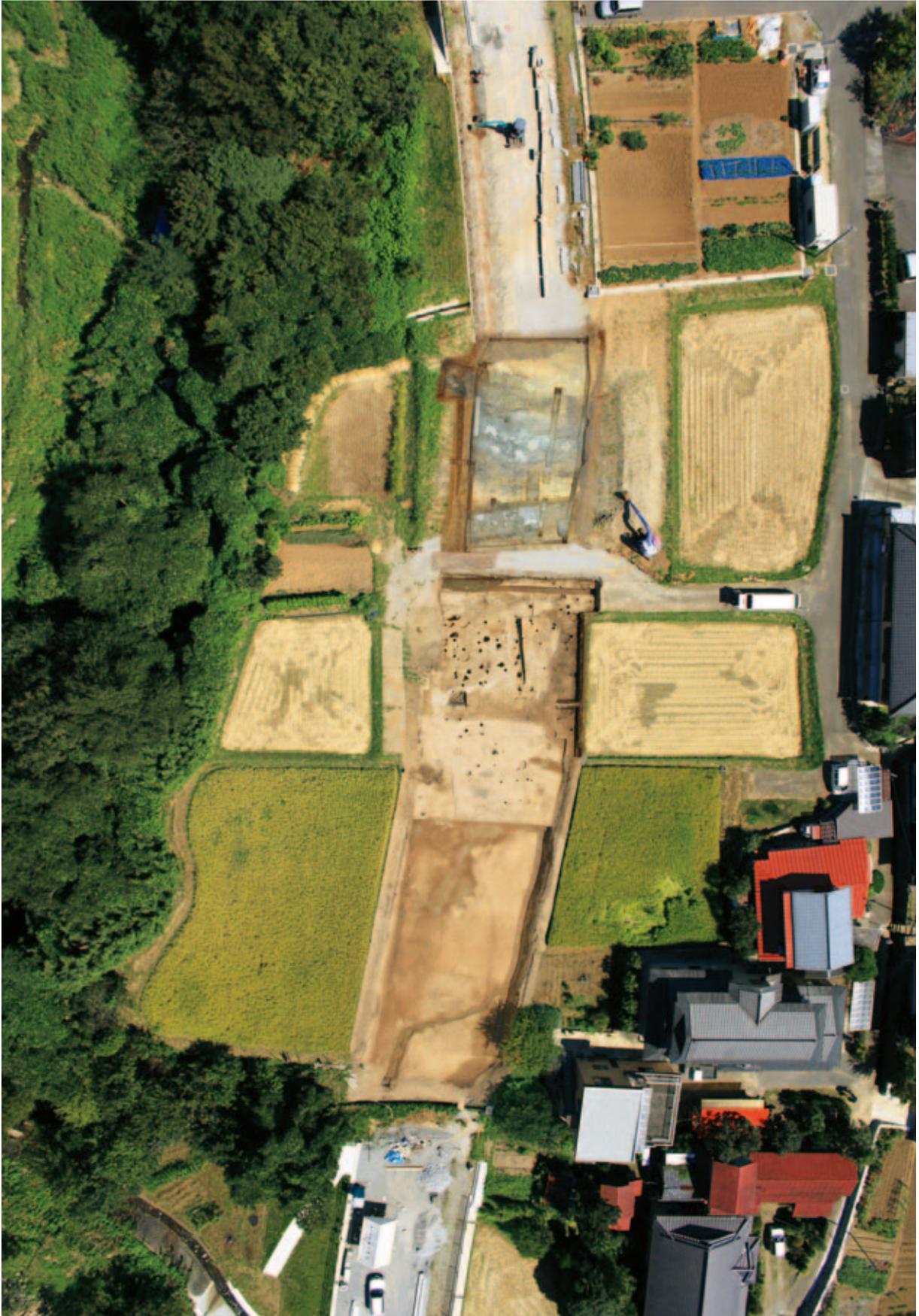


6a. アカメガシワ 13462 木口×30

6b. 同 板目×60

6c. 同 柁目×120

写 真 图 版



調査区全景（合成写真）

図版 2



1 A区全景（南西より）



2 C・D区全景



1 B区全景 (南西より)



2 遺跡遠景 (南西より)

図版 4



1 SD01完掘状況（南西より）



2 SD02完掘状況（南西より）



1 SX01 検出状況 (南東より)



2 杭列01 検出状況 (南西より)

図版 6



1 SD03完掘状況（北西より）



2 SX02完掘状況（南西より）



1 SB01完掘状況（北西より）



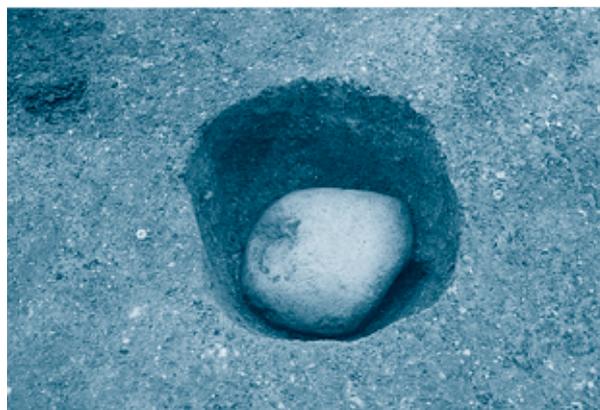
2 SP17・18・23 他完掘状況（北西より）



3 SK25・27・28 他完掘状況（南西より）



4 SP17 礫検出状況（南東より）



5 SP93 礫検出状況（北西より）

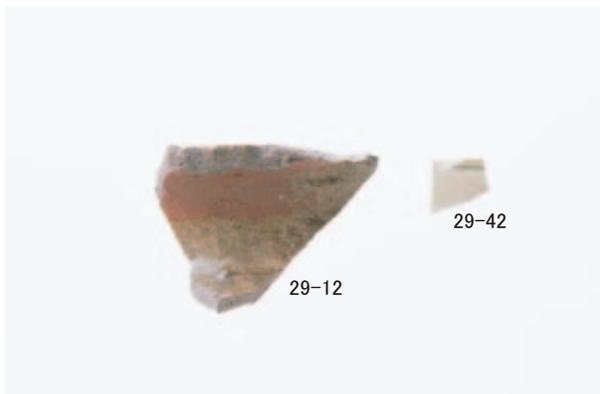
図版 8



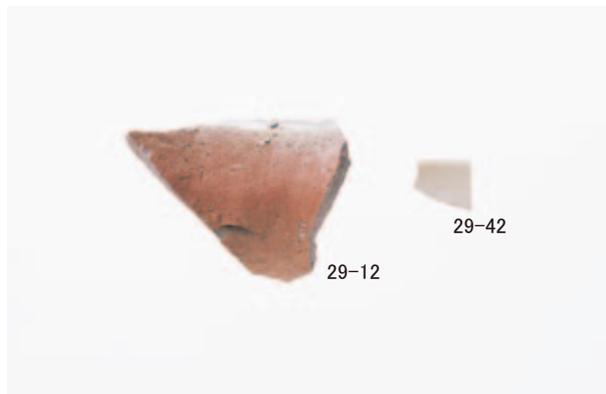
1 遺構出土陶器他（外面）



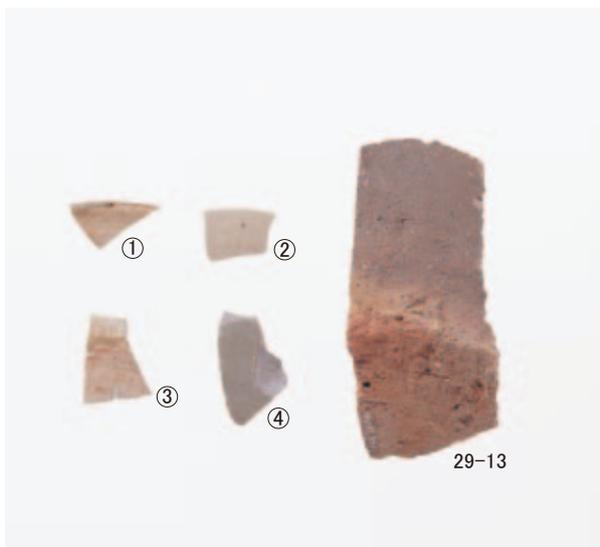
2 遺構出土陶器他（内面）



3 遺構外の陶器他（1）（外面）



4 遺構外の陶器他（1）（内面）



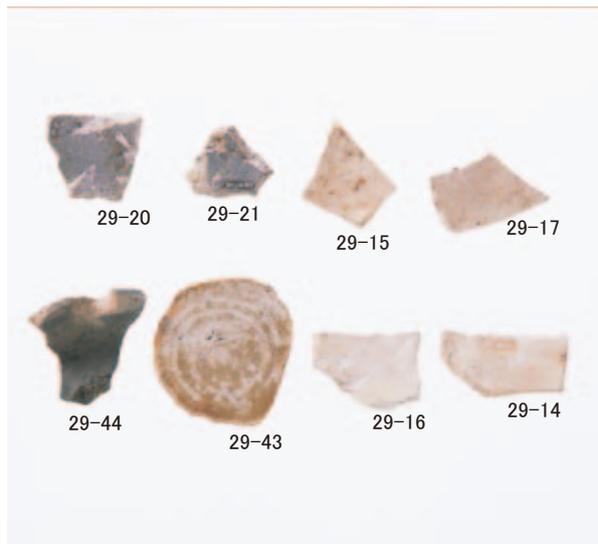
5 遺構外の陶器他（2）（外面）



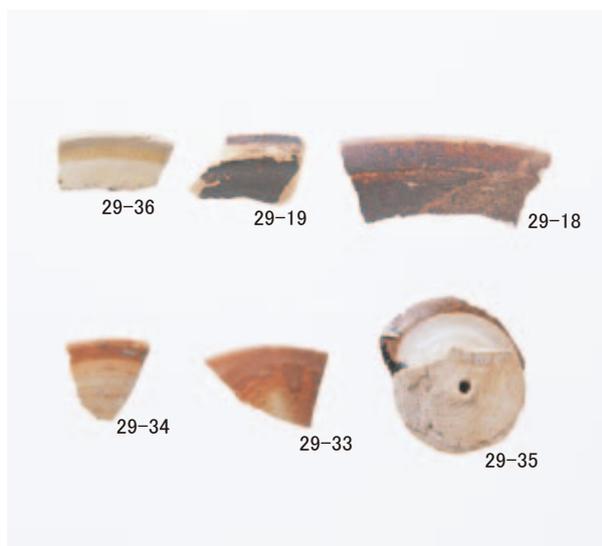
6 遺構外の陶器他（2）（内面）



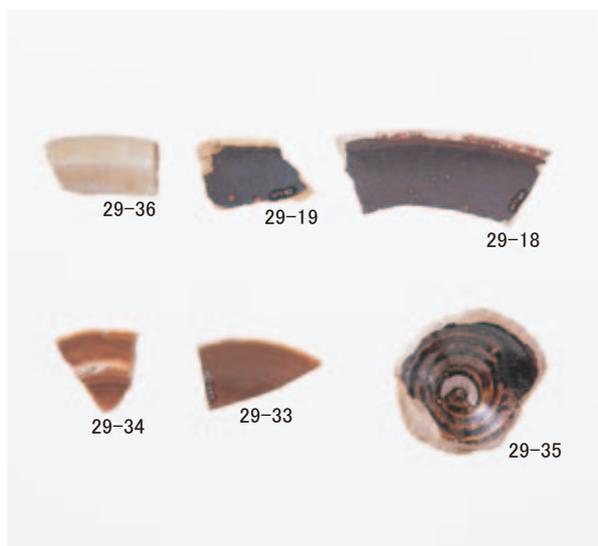
1 遺構外の陶器他 (3) (外面)



2 遺構外の陶器他 (3) (内面)



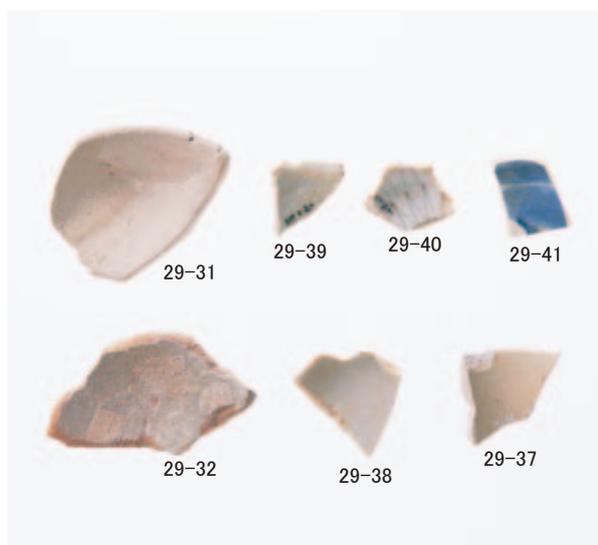
3 遺構外の陶器他 (4) (外面)



4 遺構外の陶器他 (4) (内面)



5 遺構外の陶器他 (5) (外面)



6 遺構外の陶器他 (5) (内面)

図版 10



28-5

1 SD 01 出土かわらけ



28-10

2 SX 02 出土かわらけ



29-44

3 灯明皿に転用したかわらけ



28-7

28-8

28-6

4 遺構出土かわらけ（外面）



28-7

28-8

28-6

5 遺構出土かわらけ（内面）



29-22

29-23

29-25

29-28

29-26

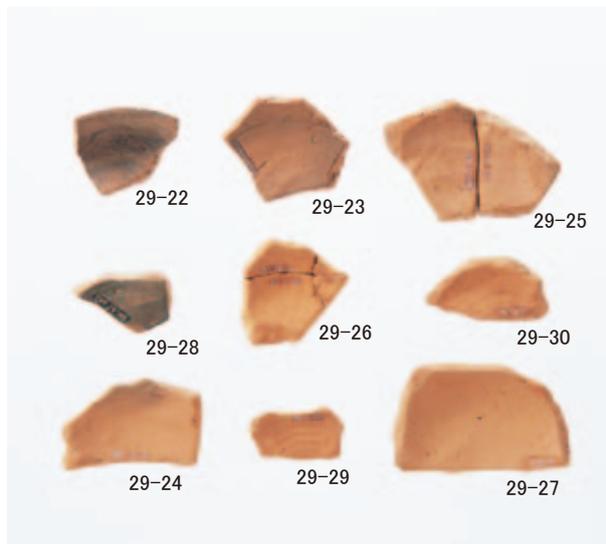
29-30

29-24

29-29

29-27

6 遺構外のかわらけ（外面）



29-22

29-23

29-25

29-28

29-26

29-30

29-24

29-29

29-27

7 遺構外のかわらけ（内面）



29-35

8 近世の乗燭



28-9

9 SD 01 出土漆椀



28-11

10 SK 06 出土砥石



11 縄文時代の
打製石斧

報告書抄録

ふりがな	ひなたやかた							
書名	日向館							
副書名	平成20・23年度（一）修善寺天城湯ヶ島線地方特定道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	岩崎しのぶ、木崎道昭、鈴木三男、小川とみ							
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054-262-4261（代）							
発行年月日	2012年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡 番号					
ひなたやかた 日向館	静岡県伊豆市日向 316-1 他	22222	28	34° 96' 38"	138° 94' 50"	20080917 ~ 20090218 20110601 ~ 20110914	1296	記録保存調査
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	散布地？	縄文				打製石斧、黒曜石碎片		他遺跡からの混入？
	散布地	古墳～古代				須恵器（甕）、土師器？		時期不明確
	散布地	平安～鎌倉	流路 橋状遺構？		灰釉陶器又は山茶碗、 国産陶器（常滑、知多）、 橋状遺構？の木製部材		流路からは12～13世紀の知多産 片口鉢が出土。その所に埋没し たか。橋状遺構？も流路と同時期 か。	
	集落跡	室町～戦国	掘立柱建物1基、土坑34基、小 穴148基、溝状遺構4基、杭列 1基、橋状遺構1基、不明遺構 1基		国産陶器（古瀬戸、大窯、常滑）、貿易陶磁 （青磁碗E類等）、瓦質土器、かわらけ（ウ ズマキかわらけ含む）、砥石、漆椀、木製 杭、炭化物		溝に囲まれた集落跡か。遺物のう ち明確なものは15世紀前半～16 世紀前半に限定される。土坑は墓 の可能性が高く、墓域が定まっ ていた可能性がある。	
散布地	江戸			陶磁器（志野、瀬戸・美濃、唐津、肥前産 磁器）		戦国時代とした遺構の中に近世の ものも含まれるか。		
要約	<p>縄文時代の遺物は採集されているが、他からの混入の可能性が高い。須恵器、土師器？の出土はあるが、時期が不明確である。調査区の最北部に存在する流路は12～13世紀に埋没した可能性が高く、それに伴う橋状遺構も同時期の可能性がある。15～16世紀の遺構、遺物から判断して、該期の溝で囲まれた集落遺跡であったと考えられる。江戸時代の遺物（陶磁器）は出土したが、遺構の存在は不明確である。伝承や過去の研究により中世の館跡に比定されていた遺跡であるが、今回の調査では館跡としての証拠は見出すことができなかった。</p>							

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第20集

日向館

平成20・23年度（一）修善寺天城湯ヶ島線地方特定道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年3月21日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261（代）
FAX 054-262-4266
印刷所 松本印刷株式会社 静岡営業所
〒420-0054 静岡県静岡市葵区南安倍1-1-18
TEL 054-255-4862